



耳

川



百



科



発行にあたって

宮崎県は、温暖な気候、明るい太陽、青い空と海、そして緑広がる大地に、多様な生物相が織りなし、私たち県民にとっても快適で住みよい豊かな自然環境を有しています。

その一方で、本県は、台風や梅雨等により大雨が降りやすい地域であるため、度々浸水による被害を受けてきました。

このため、県民の生命や財産を守るために、従来から河川改修を行ってきましたが、川と人とのかかわりが希薄となったことも事実であります。

私たちは、まず、この現状をしっかりと受け止めなければなりません。そして、大昔から、人々は川と向き合うことで、自然環境に対する畏敬の念や生命の尊さを学んできたこと、また、川が地域住民にとって貴重な交流の場として地域の歴史・文化を育んできたことを再認識し、このような川と人とのかかわりを復活し、次世代に引き継いでいく必要があります。

このようなことから、県では、このたび、「川と人との良好なかかわりの再構築」を目指して、県の北部を流れる二級水系耳川について、人々の暮らし、歴史、文化、自然環境をまとめた「耳川百科」を作成しました。

編さんに当たりましては、「耳川の歴史と文化を語る会」をはじめとして、多くの皆様に多大な御尽力をいただき、また、アドバイザーの方々には専門的観点から御指導、御協力をいただきました。ここに、厚くお礼を申し上げます。

本書を通じて、21世紀を担う子供達がますます川に親しみ楽しめるようになり、さらには、県民の皆様が川を一層身近に感じていただくことにより、「川に学ぶ」社会の実現のための一助となれば幸いです。



平成13年9月

宮崎県知事 松 形 祐 堯

もくじ

1. 川の生い立ち	1	耳川はどのようにしてできたのでしょうか。また、どうして「耳川」という名前になったのでしょうか。
-----------	---	---

2. 耳川の民話や言い伝え	10	耳川には、古くから言い伝えられたお話しがいくつもあります。
---------------	----	-------------------------------

3. 川と人々の暮らし	17	耳川の近くでは、人々はどのような暮らしをしていたのでしょうか。大昔から最近までどんな様子だったのでしょうか。
-------------	----	--

4. 川と文化人	49	耳川の近くで生まれ育った有名人や、耳川と関係が深い文化人はどのような人だったのでしょうか。
----------	----	---

1. 川の生い立ち	
1-1 大むかしは海の底だった九州山地	1
1-2 地殻の変動と陸地化	1
1-3 九州山地の隆起と耳川の誕生	1
1-4 現在の耳川の姿	7
1-5 耳川の名前の由来	9

2. 耳川の民話や言い伝え	
2-1 おせり滝	10
2-2 観音滝	11
2-3 鳥の巣トドロ	11
2-4 お牧がトドロ	12
2-5 古原トドロ	13
2-6 市山大明神	13
2-7 桂正八幡	14
2-8 立岩大明神	15
2-9 七ツ山太郎	15
2-10 おそきさん祭り(中州のお宮)	16

3. 川と人々の暮らし	
3-1 流域に残された遺跡や古墳	17
3-2 川を生活の場とした歴史	21
(1) 舟運の利用	21
① 高瀬舟	21
② 流し	22
③ 鉄砲堰	23
④ 筏流し	23
⑤ 駄賃つけ・水運・林業	24
⑥ ダイナマイトでの岩石爆破	25

(2) 渡し船	26
(3) 千石船	27
(4) 橋の歴史	28
① 舟橋	29
② 眼鏡橋	29
③ 東郷橋今昔物語	30
④ 美々津橋	30
3-3 洪水と人々の暮らし	31
(1) 洪水の記録	31
① 江戸時代におきた洪水	31
② 近代の洪水	32
(2) 洪水と百姓一揆	33
(3) 洪水による恩恵	34
① 洪水による土砂の洗い出し(港がホゲル)	34
② 材木流し	34
3-4 美々津の歴史	35
(1) 美々津港	36
(2) 上方文化の影響	36
(3) 美々津で唄を歌うな	37
(4) 美々津は県政の中心地だった	37
(5) 交通の発達	39
3-5 耳川の二大決戦	40
(1) 大友・島津の耳川合戦	40
(2) 西南の役	41
(3) 合戦にまつわる地名	42
3-6 植林の歴史	43
3-7 漁業の歴史	45
(1) 食生活と川魚	45
(2) 川魚の漁法	45

5. 水利用の歴史	55	明治から昭和にかけて、耳川の水はどのように利用されたのでしょうか。
-----------	----	-----------------------------------

6. 自然の恵み	66	耳川の近くには、豊かな自然がたくさんあります。
----------	----	-------------------------

7. 川遊び	79	耳川で、昔の子供たちはどんな遊びをしていたのでしょうか。
--------	----	------------------------------

(3) 鮎の商品価値と消費	46
(4) ダムの建設とその影響	47
(5) 県営東郷養魚場の設置	47
(6) 漁業協同組合の設立	48
4. 川と文化人	
4-1 歌人・詩人	49
(1) 若山牧水	49
(2) 小野葉桜	51
(3) 高森文夫	52
4-2 耳川の流域を訪れた文化人	53
(1) 柳田国男	53
(2) 中原中也	53
(3) 野口雨情	54

5. 水利用の歴史	
5-1 ダムの建設	55
(1) 耳川の開発と百万円道路	55
(2) 八重原の渡し	57
(3) わが国初のアーチ式ダム(上椎葉ダム)	58
(4) 上椎葉ダム建設と地域の変化	59
(5) 耳川のダムと発電所	61
5-2 その他水利用の歴史	63
(1) 耳川の導水問題	63
① 分水反対運動	63
② 水利事業の経過	64
(2) 日向・細島臨海工業地帯の工業用水	64

6. 自然の恵み	
6-1 生き物	66
(1) 植物	66
① 耳川の流域と河辺にみられる植物	66
② 耳川水系の環境変化	68
(2) 魚類	69
(3) 昆虫類	70
(4) 鳥類	71
(5) 哺乳類	71
6-2 景観	72
(1) 渓谷美	72
(2) 河口の河岸林	73
(3) 流域を代表する景観	73
6-3 耳川の幸	75
(1) 鮎漁	75
① 鮎なで漁	75
② ヤナ堰	75
③ 鮎漁の減少	76
(2) ふしイダ漁	76
(3) シロウオ漁	76
(4) 川ガニ漁	76

7. 川遊び	
7-1 魚とりの方法	79
7-2 昔の川遊び	80
(1) 材木遊び	80
(2) アユの瀬のぼり	80

1. 川の生い立ち

1-1: 大むかしは海の底だった九州山地

九州は、大むかし遠く離れた海の底でできた地層が移動してきてできています。恐竜が生きていたころは、九州は海の底でした。

【1-1】:九州山地の地層を調べると、約4億年前の古生代から約1億年前の中生代に、海中でつくられた堆積岩が多いことが分かりました。また、「おせり滝」付近には塩基性緑色岩や玄武岩質凝灰岩があることから、むかし南方の海底火山でつくられたものがここまで運ばれてきたことがわかりました。

恐竜が生きていた時代、九州山地は海の底だったのです。

※堆積岩:岩石は成因によってマグマが冷え固まった火成岩、海底や湖底に堆積した堆積岩、圧力やマグマの熱によって変成した変成岩に区別されます。

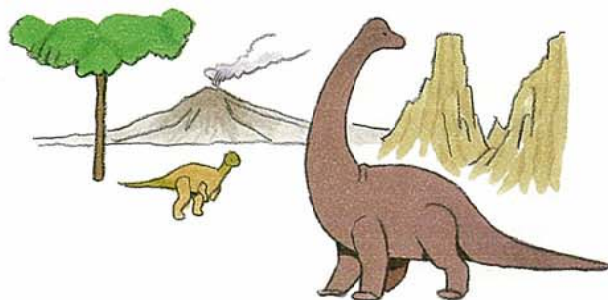


おせり滝

1-2: 地殻の変動と陸地化

恐竜がほろんだころ、海底が大きくもりあがり陸地ができました。

【1-2】:中生代の末から新生代におこった地殻変動は、畳盤となっている古生層と中世層を激しく横から押ししました。これによって、海底が盛り上がり九州山地の原型となったのです。この地殻変動は、アルプス山脈やヒマラヤ山脈と同じ時代に起こった地球規模の造山活動のひとつです。



1-3: 九州山地の隆起と耳川の誕生

人類がうまれてしばらくたったころは、耳川はなだらかな陸地を蛇行(くねくね曲がること)して流れていました。そのあと、九州山地がもりあがり、山々をけずりながら、いまの耳川の流れるようになりました。

【1-3】:陸地となった九州山地で、耳川はどのようにして作られていったのでしょうか。

山地を流れる大きな川には共通した特徴が見られます。それは、山間地では最上流を除いて折れ曲がって流れ、中流と下流ではヘビのようにくねくね曲がって流れていることです(このような流れを蛇行といいます)。

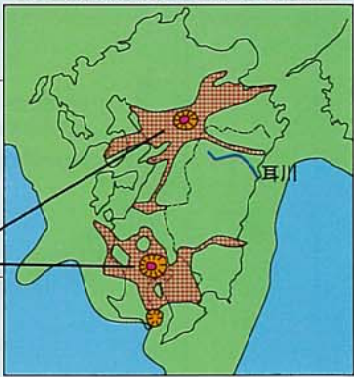
この蛇行は平地で起こるのが一般的で、九州山地のように急な山地では起こらないと言われています。このことから、耳川に蛇行ができたとき、まわりは平原状の低平地であつたと考えられます。その後、まわりの低平地が盛り上がり山地となり、もとの流れに沿って川の浸食が進んだのが現在の蛇行であると考えられます。このような蛇行は、掘削穿入蛇行と呼ばれています。

現時点で調査確認できる資料に基づいて、宮崎県北部地域、特に耳川流域の地層の成り立ちを想像すると下図のようになります。

耳川の地質史

地質時代			絶対年代	生物の歴史	耳川周辺のできごと
先カンブリア代			45億年前～	最古の生物の出現 ～バクテリア	日本全土は海底下で未形成 県北の一部が陸地化したと言われている。 秩父古生層
古生代	カンブリア紀		5億7千万年前 ～5億1千万年前	三葉虫の出現	
	オルドビス紀		5億1千万年前 ～4億4千万年前		
	シルル紀		4億4千万年前 ～4億1千万年前	魚類の出現 シダ植物の上陸	
	デボン紀		4億1千万年前 ～3億6千万年前	魚が急激に進化	
	石炭紀		3億6千万年前 ～2億8千万年前	大森林が発達 昆虫類、両生類が栄える は虫類の発展	
	二畳紀		2億8千万年前 ～2億4千万年前		
中生代	三畳紀		2億4千万年前 ～2億1千万年前	恐竜、ほ乳類の出現	四万十累層群下部
	ジュラ紀		2億1千万年前 ～1億4千万年前	被子植物、鳥類の出現	
	白亜紀		1億4千万年前 ～6,500万年前	恐竜の滅亡	
新生代	古第三紀		6,500万年前 ～2,250万年前	ほ乳類の発展	地殻変動により陸化、陸地の一部に2ヶ所の湾ができ堆積が進んだ。 日向層群（南部は日南層群）の形成
	新第三紀	前期	2,250万年前 ～1,500万年前		
		中期	1,500万年前 ～1,060万年前		尾鈴山噴火 尾鈴山火山岩、深成岩の堆積
		後期	1,060万年前 ～500万年前		(700万～150万年前) 尾鈴山以南の県中部が海底下
	鮮新世		500万年前 ～180万年前	人類の出現	
	第四紀	洪積世	180万年前 ～1万年前	(約160万年前～) 原人出現	海水準の低下と陸地化 九州山地が準平原化し蛇行が始まる ※海水準：海面の高さ
		沖積世	1万年前～	(約20万年前) ネアンデルタール人(旧人)出現 (約3万5千年前) クロマニヨン人(新人)出現	(70万～13万年前) 九州山地の隆起 蛇行流路の下刻浸食が始まる『掘削穿入蛇行』 (8万年前) 阿蘇火砕流★ 始良火砕流★

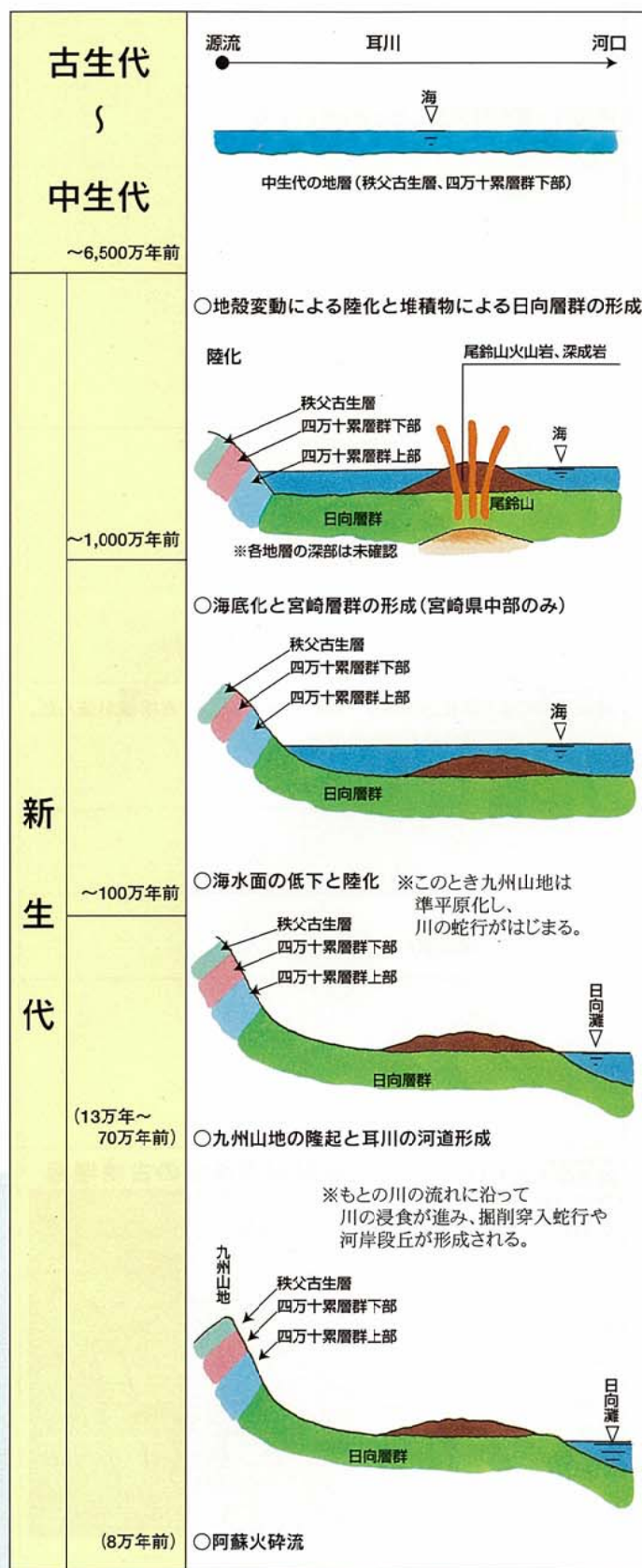
第四紀洪積世の古地理図



出典：日本の自然 九州

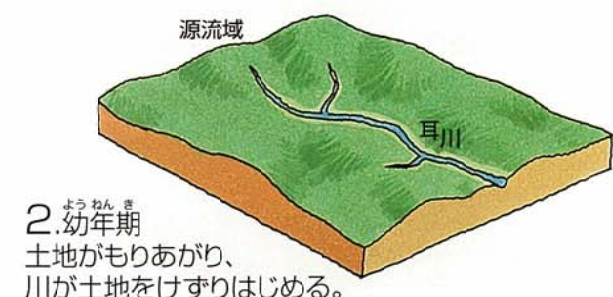
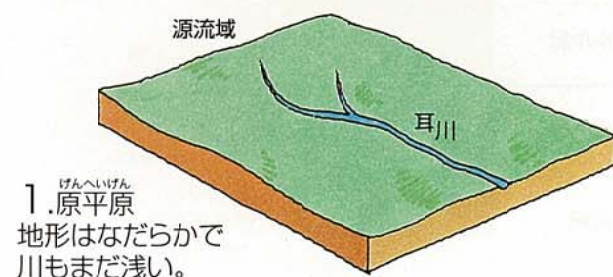
宮崎県地学のガイド、宮崎県の地質とおいたち、宮崎県高等学校教育研究会 理科・地学部会編
宮崎県地質図説明書(宮崎県の地質と資源)、S56.3宮崎県
古地理図：湊正雄らによる

耳川ができるまで

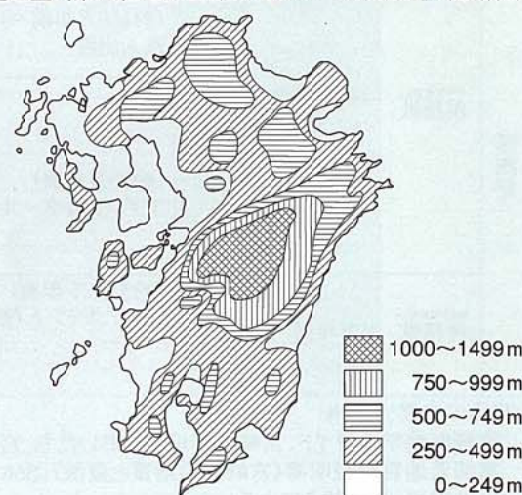


※各地層の深部について詳しく確認されていません。

耳川ができるまで 想像図



第四紀の隆起量: (第四紀地殻変動研究グループ, 1968より簡略化)



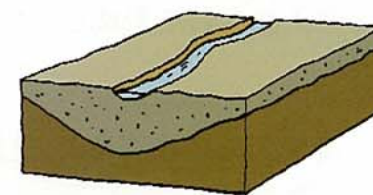
6. 現在の耳川流域

図5(準平原)のような土地がさらに盛り上がると、下図のように蛇行した川の姿のまま浸食が進み、元々の川(先行川という)の曲がった形に沿って土地がけずられ、谷が掘りこまれます。このような蛇行を「掘削穿入蛇行」といいます。

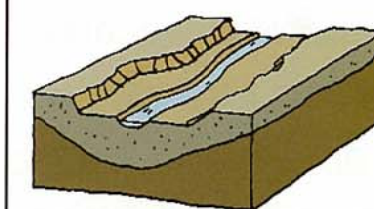


河岸段丘の作り方

第1段丘 川が運ぶレキや砂で、元の谷がうめられて平らな土地ができます。ここを第1段丘面とよび、川は段丘面を流れています。



第2段丘 川の浸食作用で第1段丘面がけずられて、第2の段丘面ができます。



鶴野内地区

第3段丘 あらたに浸食作用が始まると、さらに第3段丘が生まれます。

耳川の自然史

みやざきだいがくきょういкуぶんか がくぶ ち り がくけんきゅうしつ よこやまじゅんいち
(宮崎大学教育文化学部地理学研究室:横山淳一先生)

耳川は、北東から南西に幾重にも連なる九州山地を貫いて東南東に流下し、日向灘に注いでいます。河口部にも沖積平野はなく、上流から下流まで険しい峡谷をつくる急流です。しかも、流れは細かな蛇行を繰り返し、いわゆる穿入曲流谷を形成しています。

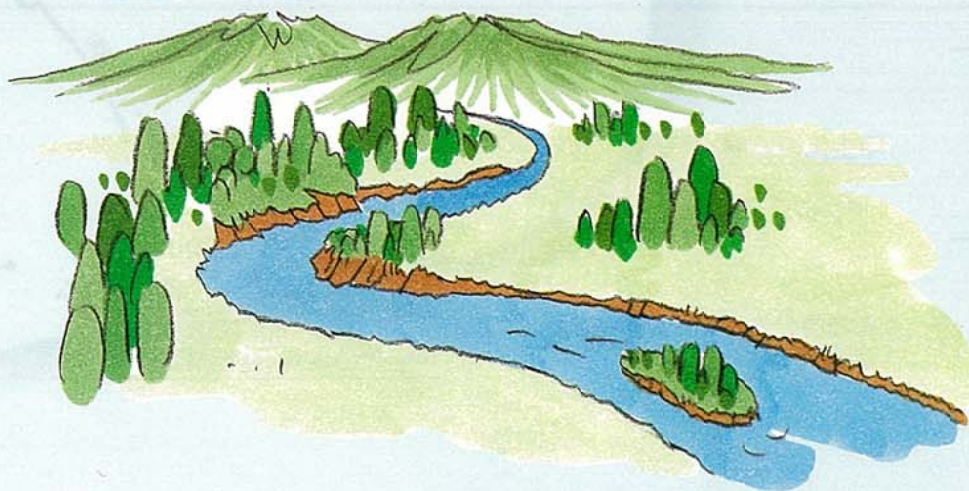
流域の地層を見ると、上流部が秩父帯、中流部が四万十帯、下流部が尾鈴山酸性岩類からなっています。従来、秩父帯、四万十帯はそれぞれ古生代、中生代の形成になる地層といわれてきました。確かに、造られた年代はそのとおりなのですが、これらの遙か遠く海洋底でつくられた地層が、後に九州の骨格となるのは中生代のジュラ紀以降になります。つまり、他の場所で造られた地層がプレートの移動により、今日の場所にたどり着いたというわけです。このような地層を付加体と呼んでいます。秩父帯は、中生代ジュラ紀の、四万十帯は中生代白亜紀から新生代中新世にかけての付加体と考えられています。四万十帯はさらに、諸塚帯、神門帯、日向帯に区別され、順次付加されました。尾鈴山酸性岩類は、約1500年前の尾鈴山の火山活動の噴出物からなっています。

耳川流域では、上記の過程により陸地化が進行しましたが、その中で耳川の流れの原型ができあがったと考えることができます。中生代から新生代にかけてのこの地域では、大きな山地はなく、かなり広い平野が発達していたのではないかと推測されています。それは、現在の九州山地の山頂付近に点々と見られる緩傾斜の平坦面の存在です。これらは、新生代第三紀の準平原面の名残とみられるものであり、準平原は地形の輪廻の最後に到達するなだらかな平野面を意味しています。この平野を原初の耳川はゆったりと流れていたのではないかと推測されるのです。

約200万年前の新生代第四紀に入^{しんせいだいだいよんき}って、日本列島は急激^{きゅうげき}な山地^{りゅうき}の隆起^{かつ}活動^{どう}が始まりました。九州山地も、紀伊山地、四国山地などと同様に隆起^{りゅうき}し今日^{こんにち}の姿になりました。隆起^{りゅうき}の原因は、太平洋からのフィリピン海プレート及び日本海海底からの圧縮^{あっしゅく}の圧力^{あつりょく}によるものと考えられています。この隆起^{りゅうき}により、耳川は、次第^{しだい}に山地化する流域^{りゅういき}に対して、浸食^{しんしょく}を開始し深い谷を形成し始めました。先行性^{せんこうせい}の曲流^{きょくりゅう}が見られるのはこのためです。現在もこの隆起活動^{りゅうきかつどう}は続いており、耳川の深い峡谷^{けいこく}もさらに発達を続けていくことでしょう。

耳川の険しいV字谷から削り出される土砂^{どしゃ}は莫大^{ばくだい}な量^{のぼ}に昇りますが、耳川河口にはこの土砂^{たいせき}を堆積^{せんがい}できるような浅海^{せんかい}や湾入^{わんにゅう}がありません。土砂は日向灘^{ひゅうがなだ}の深海^{しんかい}に送り込まれるばかりです。沖積平野^{ちゅうせきへいや}がみられない理由です。

耳川上流から中流にかけての河岸^{かがん}に点在する緩傾斜面^{かんけいしゃめん}には、阿蘇火砕流^{あそかさいりゅう}噴出物^{ふんしゅつぶつ}が断続^{だんそく}的に堆積^{たいせき}しています。約8万年前と推定^{すいてい}されている阿蘇火山^{あそかざん}の大爆発^{だいばくはつ}によって発生した火砕流^{かさいりゅう}が九州山地を越えてここ付近まで到達したことを物語っています。おそらく全流域^{かさいりゅう}が火砕流^{あそ}に覆^{おお}われたと推測^{すいそく}されるのですが、その後の速やかな浸食^{しんしょく}により、殆どすべてが洗い流され、一部が残っているに過ぎません。



1-4:現在の耳川の姿

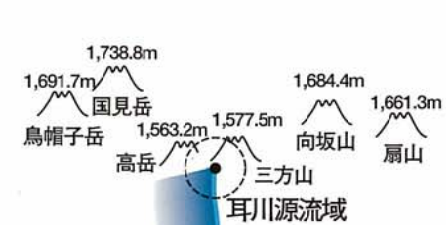
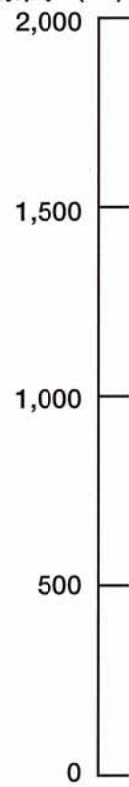
川の長さ=約100km

(このうち、河川として県が管理しているのは、河口から91.1km上流までの区間です)



日向灘

標高 (m)



中生代の地層

※各地層の深部については確認されていません。

上椎葉ダム
耳川
岩屋戸ダム
中生代の地層 (諸塚層群)



五ヶ瀬町
森林ビバ六峰街道
北方町

蛇行区間

山須原ダム
西郷ダム
大内原ダム
中の原取水口
新生代の地層 (日向層群)

河口 日向灘



耳川上流部



日向層群の赤・緑色珪質泥岩下限の衝上断層 (矢印) の上盤 (右上) は赤・緑色珪質泥岩、下盤 (左下) は乱雑層だが、大きいブロックは含まれない。諸塚村荒谷



耳川河口部



耳川中流の河岸段丘

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図を複製したものである。(承認番号 平12九複、第598号)

凡	例
二級河川 (県が管理している区間)	その他の河川
市町村界	

1-5: 耳川の名前の由来

耳川の名前は、神話の時代の言い伝えと漢字のもつ意味や漢字の音が組み合わせられてつuitaと言われています。

【1-5】: 耳川の名前の由来にはいくつかの説があります。

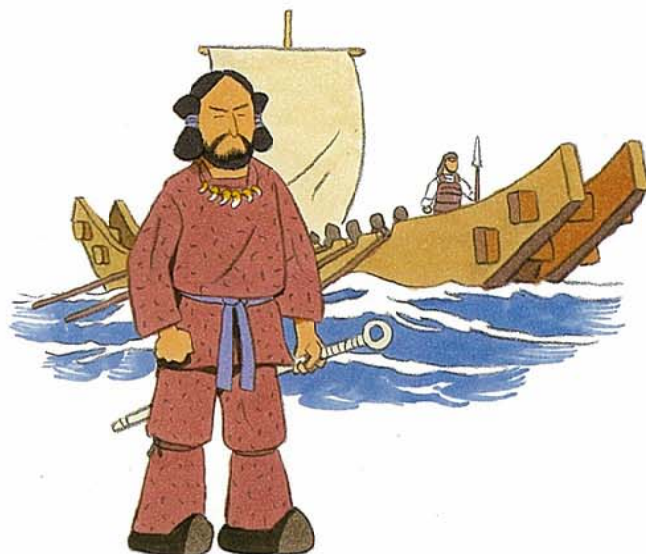
①美々津という地名の起こりは、昔、神武天皇が東の国に船を出す港として、ここを『御津』と言ったのが『美々津』と変化したのだという説があります。

②漢字が生まれた中国では、羊と大からできている『美』という字を『大きな羊』豊かで良いこと＝美しいの意味としたことと、この美しい状態を国家社会にあてはめ、バラバラなものを同じところにまとめている状態が『美』であると考えられていました。つまり、『美』は国家統一を意味し、「神武天皇が日向を発って『東のよき国』に向かい、天下統一を成功させるための船出の港として、『美々津』と呼ぶ』ことにしたと伝えられています。耳と美々は同じ意味で、天皇の港の川が美々川＝耳川なったというものです。

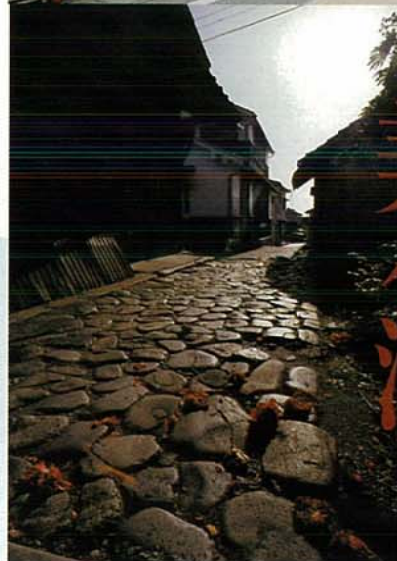
③神武天皇の旅立ちの後、日向国に残ったお妃の吾平津姫が二人の皇子、手研耳命と研耳命をなつかしんで、皇子の名の一字「耳」を港の名として残した、とも言われています。

☆谷川健一氏の説によりますと、中国南部に起源を持つ耳輪の習俗の名残に関するとのこと。大きな耳輪をつける風習の人たちが九州に渡来、とくに酋長の耳輪は大きく立派で大耳とか垂耳と言われた。それがやがて貴人への尊称となり、それが神武の系統につけられるようになったというものです。

※谷川健一: 大正10年、熊本県生まれ。民俗学者。日本地名研究所所長。



美々津の街並み



美々津港



日本海軍発祥の地石碑

2. 耳川の民話や言い伝え

2-1:おせり^{だき}滝^{お ぼる} (西郷村・小原)

耳川中流のおせり滝には、神秘的な美しさや、まわりの自然の豊かさから、龍の神様が住んでいるとの言い伝えが残っています。

その1

「正月元旦に、おせりの龍神が馬に乗って小原
の氏神にお参りに来た。姿は見えないが馬の足
音と鈴の音が聞こえ、舟渡し場の観音滝に虹の
橋がかかって村人を喜ばせた」

その2

「小原お ばるの人たちは龍神様りゅうじんに毎年ぜんお願いしてお膳※2とお椀わんを借りてお祭りをしていたが、ある年、お膳ぜんを誤って壊こわしてしまったのを、黙ってそっと返して以来、いくらお願いしても貸してくださらない」

その3

「龍神様の住んでおられる滝つぼのそばを通ると美しい鼓の音が聞こえ、金らんの美しい着物

※3金らん:錦の布に金の糸で模様を織ったもの



おせり潼

がたくさんかけてあった。もっとも心の正しい人でないとこのような物は見えなかった」

その4

「おせり滝のそばに四角い穴があり、どんなに日
 照りが続いても、この穴の水が無くなることは
 ない。日照りで田畑の水が涸れて困った時は、
 龍神様に雨乞いをすると雨が降った」

※4雨乞い:神や仏に雨がふるよう祈ること

◆耳川流域に伝わる民話マップ◆



2-2: 観音滝 (西郷村・上野原)

観音滝には、たくさんの石の観音様が谷一面にまつられているので、その名前がついています。

【2-2】: 観音滝は、尖山と日陰山との間にあります。この滝にはたくさんの石の観音像が谷一面にまつられています。「昔、足の悪い石苗というお坊さんが『足が立つようにして下さい』と願いながら一生懸命観音像を刻んだところ、足が立つようになった。」という言い伝えがあり、現在残っている石像はその時のものだといわれています。



青頸観音
(村指定有形文化財三十三観音の一つ)

2-3: 鳥の巣トドロ (諸塚村・鳥の巣)

山須原ダム下流には「鳥の巣トドロ」という名前の場所があり、いくつもの昔話が残っています。

その1

「昔、大阪の町に欲の深い米屋の夫婦がいました。米屋夫婦には一人娘がおり、この娘は父母のいじわるなやり方を悩んでいました。ある晩、白髪の神さまが現れ、『両親の悪業のせいで、お前は蛇の呪いを受けて生まれた。日向の国美々津の川上、鳥の巣トドロに早々に帰れ。』と言いました。娘は鳥の巣トドロに身を投げて大蛇となり住みつくことになったそうだ。」

その2

「川遊びが好きだった東光寺の住職が、大蛇から襲われた時（大蛇は住職の香の匂いを嫌ったのではないだろうかといわれています。）『東光寺の続く限り、この寺の住職はトドロの淵には来ない。』と願いをたて大蛇から逃れて以来、東光寺の住職はこのトドロには行かないことが代々守られている。」

※1悪業:むかしの悪いおこない
※2住職:お寺のお坊さん



観音滝



鳥の巣トドロ

その3

「ダムができる昭和初期までは、高瀬舟^{たか せ ぶね}という船によって、木炭やその他の産物を美々津港まで積み出していました。船人^{ふな びと}はこのトドロクを通る時は必ず身を清め、酒を差し出してから手を合わせて難^{なん}を逃れるようにお祈りをして通った。」

[2-3]:鳥の巣トドロクとは、耳川の山須原ダム下流にある、両岸に岩山が押し迫り、長さ200mぐらいの青々として深さの知れない神秘的な大淵です。

2-4:お牧がトドロク^{まき} (諸塚村・下長川)

真弓岳^{ま ゆみ}から流れる溪谷^{けい ぐく}の中に「お牧がトドロク」という名前の場所があります。巨岩^{きょ がん}がそびえて滝をつくり、昼でも暗く恐ろしいところです。

下長川の家にお牧という娘がいました。この娘に美しい若者が毎晩通っていたそうです。娘は若者と夫婦となる約束をしましたが、若者は名前も住んでいる所も教えてくれません。そこで娘は若者に知られないように、着物の裾に麻糸^{すそ あさいと}を縫い込んでおいて、翌朝その糸をたどって行くと、大きなトドロクに出ました。そこでお牧は声をはり上げて、「姿を見せてくれ」と叫ぶと、世にも恐ろしい大蛇^{だい じゃ}が現れました。お牧は大蛇と夫婦となる約束をしたことを悲しみ、滝つぼに身を投じて死んでしまいました。それからここを「お牧がトドロク」と言うようになりました。

「お牧がトドロク」は、昔から材木を流して通る時に恐れられている難所^{なん じょ}です。



お牧がトドロク



2-5: 古原トドロ (諸塚村・古原)

耳川の支流、諸塚から北へ分かれる柳原川の中流に「古原トドロ」というところがあります。昔は大蛇が住むと伝えられ、両岸に絶壁が迫り古木におおわれて昼尚暗く、材木流しの一番の難所といわれて必ずお神酒を上げて通っていました。

ある日古原の人がこの上の方の道を通る時、古木が横たわっていて邪魔になるので、腰の刀を抜いてそれを切り払ったところ、大きな音を立ててはるか下のトドロ淵に落ちていきました。しかし、それからその家に不幸が続く、物知りに考えてもらったら、その古木の姿をしていたのはトドロの主の大蛇であったといわれ、それから宮や

鳥居を建て村が十五夜の日、龍神さんとして祭りしました。

今は宮も鳥居も朽ちていますが、大きな供養塔と観音像は今でも子孫の尾形家が祭っています。



古原トドロ

2-6: 市山大明神 (諸塚村)

市山の「まき」の木は、市山大明神のご神木として、大切にされています。

【2-6】:市山にたくさん生えている何千年も経た榎の老木を、広瀬市兵衛という人が伐ろうとしましたが、その木は市山大明神のご神木であったためなかなか倒れず、京都の滝口大明神の印入り斧でようやく伐り倒し耳川に流されました。この榎の木を伐っている間中、毎日その付近に夫婦づれの白猿が来て、悲しげな表情で老木の倒れるのを見守っていました。そして木を流し始めると耳川に沿って、ついに美々津の浜までついて来ました。全部の流木を浜に引き上げ終わって、山師や番頭が美々津で酒盛りをしていると、その夜に浜で火災があり、なぜか途中で流した南天の木だけは、焼け残りましたが榎の木は全部焼けてしまいました。この白猿は市山大明神の使いであったそうです。それから以後、市山の榎の木は、ご神木であるとして誰も切らなくなりました。

この伝説は、当時の木材が、耳川を利用した川流しによって美々津に運ばれたこと伝えるものです。



市山神社(神社の所在地は椎葉村です。)

※神木:神社の境内に生えていたり、神霊が宿ると考えられている木。

2-7: 桂正八幡 (諸塚村・立岩、桂)

桂正八幡の神さまは京都からきたと言われ、
ここにはそのとき神さまをお迎えに行った人た
ちのお墓が残っているそうです。

【2-7】: 桂正八幡の神様は京都の葛城神社から来られたと伝え
られています。その時に、この神をお迎えに行った人のお墓が残
っているといわれています。

また、大友宗麟が島津氏と耳川で戦ったとき、水攻めに会い水
に流される時、桂神から助けられたので刀を奉納したとも伝え
られています。さらに、この戦に参加して桂で死んだという北里
伯耆守のお墓もあります。



桂正八幡

【北里伯耆守戦死の跡】

熊本県の阿蘇家では昔、大宮司の職をめぐっ
て兄弟で争いが起こり、遂に戦争にまでなりました。
兄の惟長は鹿児島島の島津軍の応援を頼み、弟の
惟豊を攻めました。その為、惟豊は破れ、家臣の
北里伯耆守為義(小国城主)と共に、日向の高千
穂に逃れたましたが、なおも島津軍が追いかける
ので、諸塚の七ツ山から立岩桂までたどりつき、
そこで為義主従二十八人は全員非業の死を遂げ
ました。

その後、小国の子孫にあたるという人が何人
も墓参りに訪ねてきたといわれています。



北里伯耆守のお墓

2-8 立岩大明神 (日向市・美々津)

大むかし、^{つが}櫓の^{ふし}節の舟にのって耳川を下ってきた^{だいみょうじん}大明神様を、美々津の人が^{まつ}むかえてお奉りしたのが、美々津の^{たていわじんじや}立岩神社といわれています。

【2-8】：一説には、^{たていわだいみょうじん}立岩大明神こそ^{じんむ てんのう}神武天皇で、^{つが}櫓の^{ふし}節の舟に乗って耳川を下ったと言われており、それから^{たていわ}立岩では^{つが}櫓の^{ふし}節は^たたい^{まつ}まつに^{ふしやう}焚かないと言う風習が残されています。



神武天皇が腰掛けたといわれる岩



立岩神社

2-9 セツ山太郎 (諸塚村・セツ山)

四ツ山太郎という山の精が魚売りの手助けで三ツ山太郎に勝ち、セツ山の精になったお話があります。

「ある日、魚商人は^{ぎやうしょう}行商で日が暮れたため、農家の^{じい}爺さんに泊めてもらうことにしました。爺さんは、山の精で四ツ山太郎といい、三ツ山太郎が^せ攻めてくるので商人に手助けを頼みました。商人の手助けにより三ツ山太郎を倒し、^{じい}爺さんは四ツ山と三ツ山を合わせてセツ山の精になることができました。お礼に商人にセツ山の木を全部あげると言いました。

間もなく商人の手で^{もろつか やま}諸塚山を中心とした山々の木がきり倒されると、^{ふし ぎ}不思議なことに、材木はひとりでに川にすべり込んでいきました。耳川には毎日毎日、たくさんの材木が流れました。言う



諸塚山の冬景色



現在のセツ山地区

までもなく商人は大金持ちになったということです。」

※行商:店を持たず、商品を持って売り歩くこと

2-10:おそきさん祭り(中州のお宮)^{まつ なか す みや}(西郷村・田代)

「おそきさんの祭り」はおそき太郎という池の水神^{すいじん}のお祭りです。川の水によって生活^{すい}をしていた人々の、水への尊敬^{そん けい}と感謝^{かんしゃ}を表した言い伝え^{つた}も残っています。

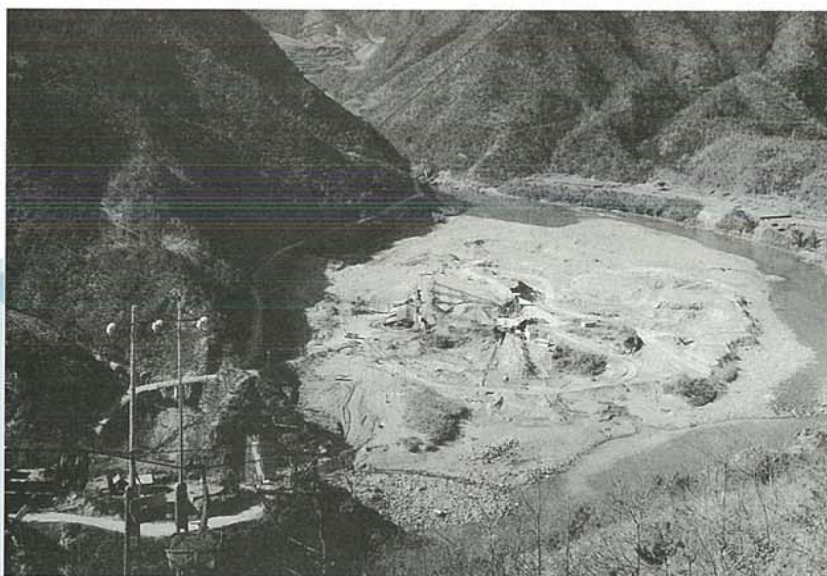
「この水神さんには多くの願^{がん}立てごとがあつて信仰^{しんぎょう}が深く、老人達がおとこえ峠^{とうげ}を越える際、霧が深くて道に迷った時など、おそき水神に願^{がん}立てして祈ると、不思議に霧がすうっと消え無事に峠^{とうげ}を越えることができた。」

【2-10】:西郷村大字田代おそきに、おそき太郎をまつる祠^{ほくら}がありますが、旧暦^{きゅうれき}11月6日に「おそきさんの祭り」が行われています。以前は川の中州にお宮があり、大きい石がまつてありました。そのそばに池があつたところから、おそき太郎を池の水神とも称したとされています。この祭日には必ず村の若者が盛んに相撲をとっていました。



中州のお宮があつた場所

※現在、中州のお宮があつた場所は、大内原ダム^{だいなるだむ}の建設によって湖底に沈んでしまいました。



大内原ダム建設の様子(昭和30年頃)

3. 川と人々の暮らし

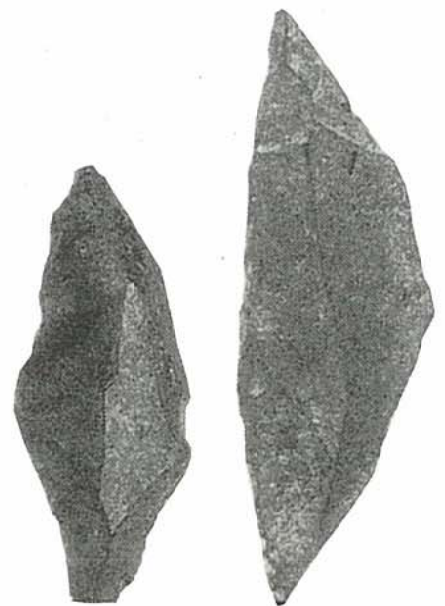
3-1: 流域に残された遺跡や古墳

旧石器時代

今からおよそ3万3千年前から1万2千年前の後期旧石器時代には、耳川流域には人が生活していました。

【3-1 (旧石器時代)】: 日本に人類が暮らし始めたのは、今から3万3千年以上前の前期旧石器時代とされていますが、この時代に人が生活していた跡は、九州ではごくわずかに発見されていません。それから後の1万2千年前までの時代は後期旧石器時代と呼ばれ、氷河期の最後のとても寒い時代でした。

この時代の人々は、大型草食獣の狩りや植物性食料の採取をしながら、小河川の流域など一定の範囲内で移動生活をしていたと考えられています。狩猟には、ナイフ形石器や剥片尖頭器、細石刃などの道具を使用していたようです。耳川の西郷村の向内野々遺跡でナイフ形石器などが出土していることから、後期旧石器時代には耳川流域にも人が生活していたことがわかりました。



三稜尖頭器
(西郷村仮迫)

ナイフ形石器
(西郷村向内野々)

自然と暮らし— (耳川文化の会 中田 豊さん (東郷町) のお話)

今から70年位前に私がおとしよりから聞いたり、自分で直接みた我が村の自然と生活の一部を話してみよう。

山を眺めると今どこもそこも杉の木を植えている処が多いが、その頃は雑木林が多かった。そしてね、各区には茅立野といって家の屋根を葺く茅を切る野原が必ずあった。それだから瓦屋根の家は何処そこにあるくらいで、後はみんな茅ぶきの家ちゃった。

また、雑木林が多かったから炭焼きをする人が多く、飯をたくにも、風呂を沸かすのもみんな薪をたいていた。

川は今のよう「よしの子」は生えておらず、立派なもんちゃった。夏の頃、耳川や坪谷川に水浴びに行くと喉がかわくと、その川の水を呑んだりしたもんだ。そんなに川の水がきれいちゃった。

だから、魚がぎょうさんあって、特に夏などはみんな川に行くと鮎かけをしたり、イダつりをしたりしたもんだ。

そうすると山から伐り出して流す材木が川上の方から流れてきたり、炭を一ぱい積んだ高瀬舟が下ってきたりして、楽しい、のどかな風景ちゃった。

道路は富高から西郷村に通ずる県道と坪谷を通って南郷村に通ずる県道などのほかは、1メートル50センチか、1メートル位

の狭い道で夏の雨が降る時はぬかるみになったり、又冬の霜がふる頃は霜どけがして、どろどろになったりしたもんちゃったよ。

学校の生徒はその道を夏はハダシで歩くので教室の入口には1メートル50センチ四方の水タンクが造ってあってそこで足を洗って上り口においてある麻袋で足をふいて上がっていたので廊下はいつも泥で汚れていたものだ。冬でもズックをはく者は減多にいないので、たいてい草履がハダシであったので、足にはヒビが一ぱいできて、夕方お湯に入るときは痛くてたまらなかった。

今こそ、この辺には麦を作っていないが、その頃は田も畠も麦が作ってあったので、春になると、その麦が一斉に穂を出す、その穂に混じって病気にかった黒い穂が出るので、それを取って麦苗をつくって吹いて、麦畠に巢をかけたヒバリの鳴く声と一緒に和やかな雰囲気だった。

農家が一番忙しい時期は田植えどきで、そのときは小学生も学校を休んで手伝いをしたり、子守りさせられたり。また、学校に小さい子供を連れて来て勉強する生徒もいた。

色々たくさん話があるが今日はこのくらいにしておこうかね。

縄文時代

縄文時代には定住化がはじまり、耳川沿いに人が集まり暮らしていたようです。

【3-1(縄文時代)】:今からおよそ1万2千年前にはじまった縄文時代には、温暖化により狩猟中心の生活から植物食を中心とした生活に変わっていきました。またこの頃から漁労が発達し、食べ終わった魚や貝などを捨てた跡が貝塚として現在でも残っています。西郷村の遺跡の分布から考えると、耳川流域では川沿いに2～5キロメートルの間隔で人が集まり暮らしていたようです。

※漁労:仕事として水産物をとること

弥生時代

弥生時代には米作りが広まり、水田を中心にした社会が形づくられていきましたが、山地では縄文的な社会も残っていました。

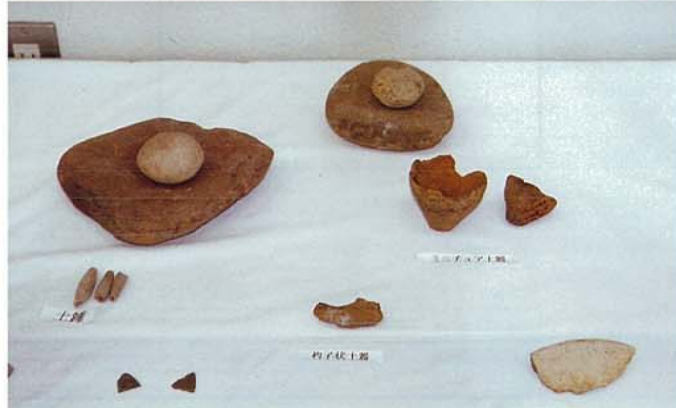
【3-1(弥生時代)】:今からおよそ2千3百年前から1千7百年前までの間は、水稻耕作を中心とする食料生活が始まった段階で、弥生時代と言われています。この頃、朝鮮半島からの渡来人がもたらした米作りが広まり、低地と内陸地に水田を中心にした社会が形づくられていきました。しかし、山地では狩猟と採集や焼畑(陸稲)を続ける縄文的な社会も残っていました。

古墳時代

日向地方では4世紀の後半頃に最初の方後円墳が築かれ、耳川本支流でも遺跡が発見されています。

【3-1(古墳時代)】:今からおよそ1千7百年前(3世紀の後半)から1千3百年前(7世紀)までは、各地の有力者の大きな墓である方後円墳が築かれた古墳時代でした。初期の古墳は、畿内、中国地方と北部九州を中心とする西日本各地で築かれていました。

日向地方では、3世紀の後半頃に生目古墳群や西都原古墳群において最初の方後円墳が築かれ、耳川本流や支流では緩やかな丘陵上などに小円墳や遺跡が発見されています。



縄文・弥生時代の土器・石器(東郷町出土)



西郷古墳(西郷村)



箱式石棺(西郷村)

流域に残された
遺跡や古墳・遺跡位置図



史跡一覧

資料:「全国遺跡地図(宮崎県)」昭和43年・文化財保護委員会/「日向市の歴史」昭和48年・日向市/各市町村史等

区分	番号	名称	(時代)	番号	名称	(時代)
日向市	1-1	飯谷古墳		1-3	遠見古墳	
	1-2	余瀬古墳				
東郷町	2-1	小野田遺跡	(縄文・弥生)	2-8	山陰城址	
	2-2	老谷遺跡	(弥生)	2-9	坪谷城址	
	2-3	鶴野内遺跡	(縄文・弥生)	2-10	西城址	
	2-4	一谷原遺跡		2-11	樋田遺跡	
	2-5	山陰古墳		2-12	広瀬田遺跡	
	2-6	鶴之内古墳		2-13	赤松遺跡	(弥生)
	2-7	日田尾古墳		2-14	下水流遺跡	(縄文・弥生)
西郷村	3-1	八幡ノ前古墳	(縄文)	3-12	石塚の鼻遺跡	(縄文・弥生)
	3-2	棕原遺跡	(縄文)	3-13	鳥の巣遺跡	(縄文・古墳)
	3-3	内面遺跡	(縄文)	3-14	西郷古墳	(縄文・古墳)
	3-4	藤野長堀遺跡	(縄文・弥生)	3-15	内野々遺跡	(縄文・弥生・古墳)
	3-5	外園遺跡	(縄文)	3-16	上円野城址	
	3-6	曾谷原遺跡	(縄文)	3-17	上野原城址	
	3-7	上野口原遺跡	(縄文・弥生)	3-18	仮迫城址	
	3-8	川原遺跡	(縄文・古墳)	3-19	下八峽城址	
	3-9	若宮西ノ前遺跡	(縄文)	3-20	道野々原城址	
	3-10	庵元遺跡	(弥生)	3-21	鳥の巣城址	
	3-11	赤木遺跡	(縄文)			
諸塚村	4-1	藤の塚遺跡		4-4	諸塚古墳	(縄文)
	4-2	松の平古墳		4-5	塚原城址	
	4-3	川の口遺跡		4-6	矢村城址	
椎葉村	5-1	大河内遺跡	(縄文)	5-8	和戸内山遺跡	(縄文)
	5-2	人夫屋敷遺跡		5-9	岩屋戸遺跡	(縄文)
	5-3	御池遺跡		5-10	小ヶ倉遺跡	(縄文・弥生)
	5-4	竹の枝尾遺跡		5-11	中の八重遺跡	(縄文)
	5-5	下福良遺跡		5-12	中の八重浄行寺西側遺跡	
	5-6	尾田遺跡		5-13	御用塚	
	5-7	十根川神社周辺遺跡		5-14	羽田遺跡	



1-1:飯谷古墳



2-8:山陰城址



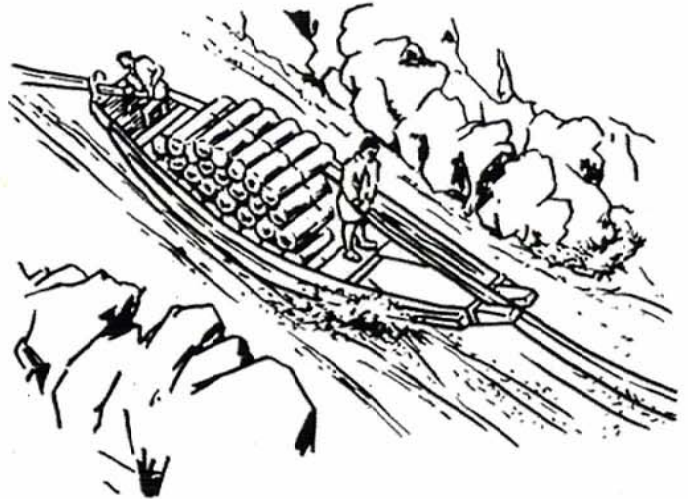
2-10:西城址



この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図を複製したものである。
(承認番号 平12九複、第598号)

3-2: 川を生活の場とした歴史 (1) 舟運の利用

耳川上流でとれる産物や木材は、川を使って下流や都会へと運ばれていました。むかし、川は荷物を運ぶ大事な『道』だったのです。



木炭を積載し急流を下る高瀬舟
(資料: 西郷村役場)

① 高瀬舟

高瀬舟は木炭やその他の産物を美々津港まで運ぶ大切な舟で、西郷村笹陰からは、一日で往復することができず、二日かかっていた。

[3-2-(1)-①]: 人々は高瀬舟に木炭やその他の林産物(しいたけ・堅木・コウゾ皮・シロ皮等)を積んで耳川を下り、美々津港で木炭問屋などに卸していました。問屋はそれらを千石船に積み込んで大阪、京都といった都会で商品として売りさばっていました。

木炭の生産量は諸塚村、西郷村が最も多く、高瀬舟は西郷村、東郷村(現東郷町)が多かったようです。山陰あたりの船頭は、舟を西郷村笹陰あたりまで上り荷物を積んでいましたが、一日で往復することはできず二日がかかりでおこなわれていました。

椎葉や諸塚あたりの川底には、大きい岩や石があり流れも急でとても危険なので、諸塚村吐の川より下流が適当な積荷の場所だったようです。

上りは川の流に逆らっての舟運びだったのですが、美々津から余瀬、飯谷、鳥川あたりは流れもゆるやかで、潮の満ち干によつては比較的楽に上れた日もあったということです。竹竿に白帆を揚げて川をすいすいと上っていくようすは、とてものどかな風情だったでしょう。

高瀬舟

——(耳川文化の会 中田 豊さん(東郷町)のお話)

(高瀬舟)は長さ15メートル位で、巾は舟べりの一番広い処で2メートル位の舟に木炭や椎茸や木材などを積んで運ぶので大変な仕事であった。美々津まで下って行って、今度は川を遡るには、丁度よい風でもあれば真白い帆を上げてすいすいと楽にのぼってくるが、風がない日は船頭の自力で漕いだり曳いたりして上らねばならないので、仲々骨の折れる仕事であった。

河原のない処は二人の船頭が力を合せて漕ぎ、帆を上げて風の応援を求め、河原がある処では一人が六尺褌に裸脛で草鞋をはき、真白い紡績の綱を肩にかけて引っ張り、舟に乗っている者は斜めに沖に漕ぎ出すようにして、舟をのぼらせる作業は重労働であったようである。

なが ② 流し

木を一本一本川に流し込んで、そのまま目的地まで運ぶ「流し」では、山師^{やまし}たちが下流までおいかけて流していました。

【3-2-(1)-②】：流しというのは、木材をイカダにせず一本一本川に流し込んで、そのまま目的地まで運ぶ方法です。途中では、流し^{やまし}の山師^{やまし}たちが鳶口^{とびくち}（棒の先に鉄製のかぎを付けたもので、物を引き寄せたりするのに用いる）を持って、一本一本岸边にたまる木を流れに乗せることを繰り返しながら、下の網場^{あば}まで追い流していました。

網場^{あば}とは川に綱^{つな}や網^{あみ}を張り渡して流木をいったん集合させる場所で、そこからまた次の網場^{あば}まで流します。



流し山師による木材流し
(資料：西郷村役場)



流し山師たちも着ていた仕事着
(東郷町・写真はシュロミ)

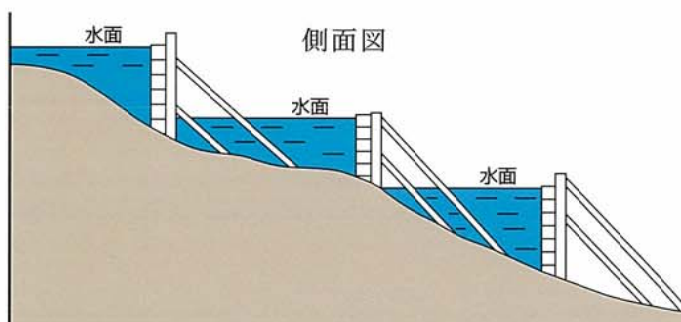
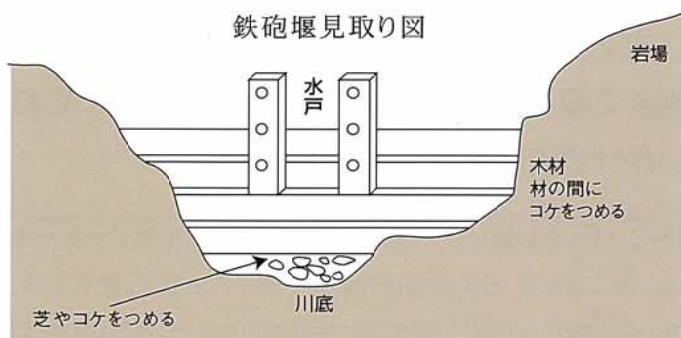
③ 鉄砲堰

切り出して谷川にためた木は、「鉄砲堰」などで水の力を利用して下流へ流しました。河口までは、長いときは半年以上かかりました。

【3-2-(1)-③】：谷川に落として貯まった木（「つけこみ」と呼ばれていた）を下流に流し出すためには何度か「せき流し」をしなければなりません。秋から冬にかけて山奥から本流の耳川に集められた木材は、3月頃から「流し山師」によってさらに下流に流されました。数十人が「流し」に当たり、上流のほうから泊まりがけで何日もかけて川下に向かっていきました。そして美々津幸脇の土場につくのは、半年位かかることもあったそうです。

美々津、幸脇の浜についた木材は、陸上げして乾かしたあと、大阪方面へ送られました。

木材の川流しとイカダ流しは命がけの仕事でしたが、荷馬車の利用の出来るような道路が建設され、ダム、発電所の建設開始と共に、耳川からその姿を消して行きました。そしてついに、昭和7、8年頃にはこの情景は全く見られなくなりました。



※鉄砲堰：堰は下流の谷間に木材を集めておき、上流の堰を一度にきって、一気に木材を押し流すのでこの名がつけました。

④ 筏流し

古くからたくさんのお木がとれた入郷地帯では、イカダで木を下流へ流していました。

【3-2-(1)-④】：奥地の山で木を切って、それをイカダに組んで流すイカダ流しが耳川では昔からよく行われていたようです。美々津近くになると楽になりますが、上流では細心の注意が必要で、危険を常に伴っていたということです。



木材の搬出用具(宮崎県総合博物館展示)



⑤ 駄賃つけ・水運・林業

明治の初期頃まで、山で生産された物を売りに出かけたり、必要な物を持って帰るため、馬に荷を積み目的地まで運ぶ「駄賃つけ」という仕事がありました。

【3-2-(1)-⑤】：高い九州山脈に囲まれた^{しいば もろつか}椎葉や諸塚地方は田畑が少ないので、主に林業に^{たよ}頼って生活をしてきました。クヌギ、ブナ、ツガ、ケヤキなどの良い木があることから、椎茸や木炭、木材などの生産が盛んで、また焼畑農業を中心にした^{ざっく}雑穀やお茶の^{さいばい}栽培も行われていました。そこで作った物を売り、生活に必要な物を運ぶ方法が「駄賃つけ」でした。これは、馬に荷物を積み目的地まで運んでお金をもらう仕事のことで、農家の大事な仕事のひとつでした。

この地方では、明治の初期頃まで馬や川舟で運ばれていました。大きな物は、耳川の流れを利用しイカダや川舟で美々津の港まで運んだようです。

駄賃つけによって運ばれた^{さんぶつ}産物は木炭、椎茸、茶、カジカワ、シュロ皮、木くらげ、キブシ、^{さんさい}山菜などで、持ち帰るものは米、塩、海産物、^{こぶく}呉服、^{とうき}油、陶器などでした。駄賃つけによる荷物運びも明治の中期以降、村に店ができたり道路が整備され次第に^{しだい}少なくなり、昭和の初期頃を境にしてその後はほとんど見られなくなりました。

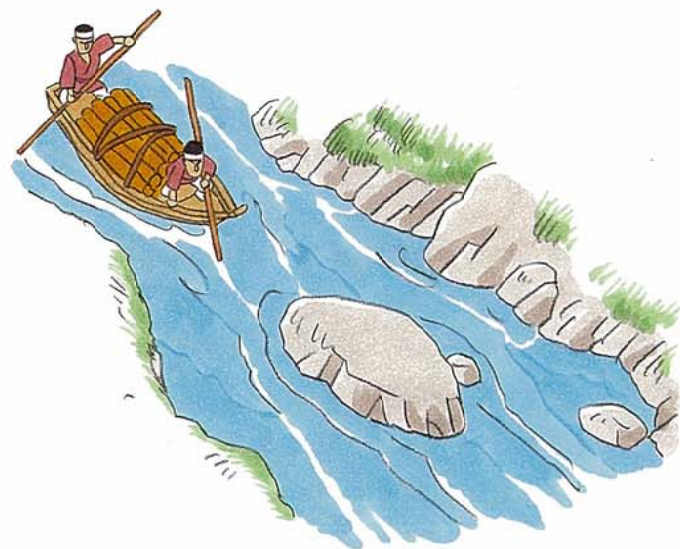


木炭の運搬道具(宮崎県総合博物館展示)



⑥ダイナマイトでの岩石爆破

昭和初期、塚原と田代の間に舟の通行のじゃまになる所があったので、村人はダイナマイトを使って岩を爆破し、舟やイカダを通りやすくしました。



【3-2-(1)-⑥】：明治中期から昭和初期までは、小八重と美々津港の間を舟やイカダが盛んに行き来していました。塚原(吐合)荒谷の間は途中に岩のある危険な場所があり、荒谷から小八重を通り美々津河口まで行けたのは、明治後期から大正初期になってからのようです。塚原、田代の間には岩石が舟のじゃまとなっている所があったので、村人は冬の水量の少ない時期に、ダイナマイトを使って岩を爆破し、舟やイカダの通行をしやすいようにしたという記録が残っています。この爆破作業では、事故で亡くなった方がいて、現在、吐の川に遭難の記念碑が建立されています。

遭難記念碑 明治廿七年三月建設
「甲斐筆治氏、宮崎県西臼杵郡諸塚村一人、資性温厚、寡言、義侠心ニ富ミ、屢他人ノ急ヲ救ヒタル事衆人ノ目撃スル所ナリ、明治元年年令十七ニシテ弁指職ニ擧ラレ続イテ保長トナリ、組合世話人トナリ勤続十五年、明治廿二年町村制実施ニ際シ諸塚村会議員ニ推選サレ土木事務ヲ分掌ス。同廿五年一月耳川上流舟路開削ノ工起ルヤ之ガ監督トナリ、西郷村地先キ宇松附瀬ニエヲ起シ、爾来勉勵其任ヲ尽セシガ同年三月七日、崩ノ瀬工事中ダイナマイト爆烈シテ非命ノ死ヲ遂ゲタリ。
時二年四十七実ニ諸塚村ノ為ノ功勞少ナカラズ、而巳ナラズ将来有為ノ人物ヲ失フ事全村挙テ痛惜セザルナシ、本部有志ノ發起ニ依リ廣ク義援金ヲ募集シ石碑ヲ建設シテ其ノ靈ヲ弔フ。」



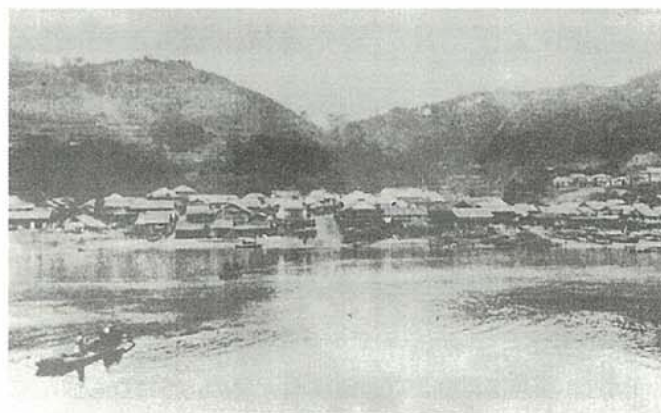
甲斐筆治遭難記念碑

(2):^{わた}渡し船^{ぶね}

耳川の上流では流れが急なため、渡し場の数はとても少なかったようです。大正時代には、美々津と幸脇のあいだを渡し船がかよっていました。

【3-2-(2)】:耳川の本流、特に美々津付近、東郷町、西郷村を流れるあたりには渡し場があり、人や荷物を運んでいました。それより奥地は流れも崖も急だったため、渡し場を作ることが難しかったのです。現在の椎葉村那須橋あたりや諸塚村には渡し場があったそうですが、耳川の渡し場の数は極めて少なかったようです。

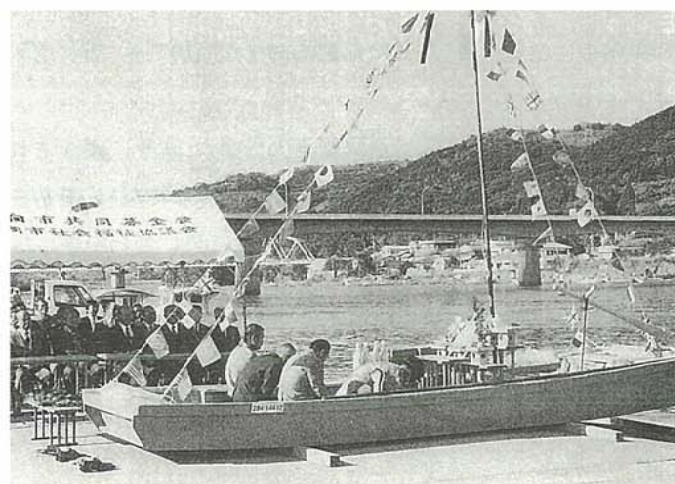
大正時代、日向市・耳川の渡し船は、美々津と幸脇を結び、客馬車の乗り場があり両方の船繋ぎ場でお客さんを渡していました。この渡し船も美々津大橋が完成してからは姿を消しました。



渡し船



美々津に残っている渡し場の面影
※「渡し船ご利用の方は旗を上げて下さい」と書かれている。



渡し船復活の催し(現在は行われていない)

◆耳川の主な渡し場の位置図◆



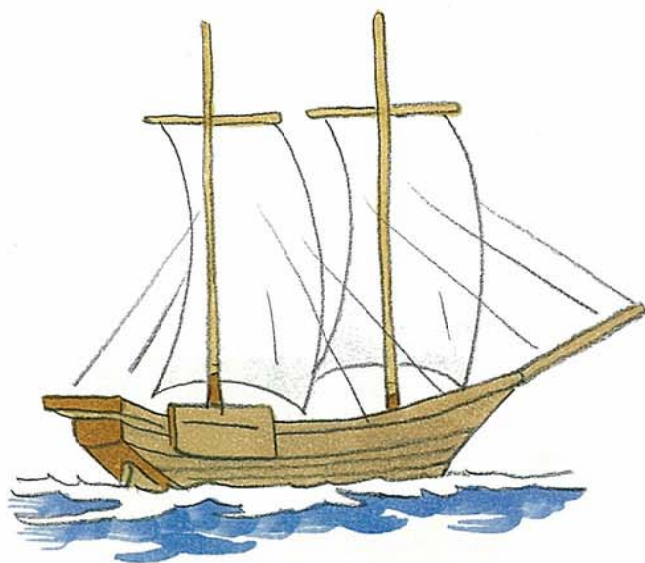
※山陰村には、この他に宮ヶ原渡し・横瀬渡し・仲の原渡し・滝下渡し・下村渡し・硯野渡し・大工野渡し等がありました。

(3):^{せん ごく ぶね}千石船

明治や大正時代の美々津は、^{はん せん}帆船の柱がたくさん立ちならび大きな商港として^{しょうこう}栄えていましたが、次々に建設されたダムや鉄道の開通で利用されなくなり、小さな漁港になってしまいました。

【3-2-(3)】:明治や大正時代には^{せんごくぶね}千石船と呼ばれる、2～3本マストのあまり大きくない^{はん せん}帆船が多く使われていて、^{たていわ}立磐神社あたりから^{くらそう こしごえ}鞍蔵、腰越あたりまで、帆船の柱が林のように立ち並んで、川上から流されてきた木材や、^{たか せぶね}高瀬船で運ばれてきた^{ふなづみ}椎茸等を積み込んでいました。船積は天候によっては4～5日かかりました。当時帆船のことを^{は まえぶね}帆前船と呼び、風の向きが順調でも、^{はんしん}阪神地区まで15日以上かかりました。

大正12年の^{につほう}日豊本線の全線開通の影響や、次々に建設された水力発電ダムのため、耳川は完全に物を運べなくなり、港もさびれてしまい、現在は主に小さな漁船のための港に変わりました。



千石船



(4):橋の歴史

橋は最初、丸太橋のようなかんたんなものが
作られ、だんだんと発達しました。

2.木 橋

木を組んで造る橋です。洪水で流されることもあります。



4.眼鏡橋（石橋）

石を組んで造った橋で木橋より丈夫です。



6.コンクリート橋

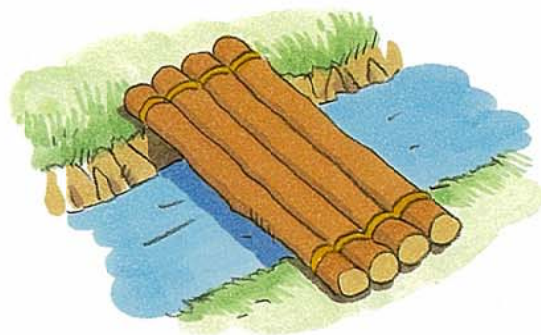
コンクリートで造る橋で、多くの橋が造られています。



美々津大橋

1.丸太橋

木を切って川に渡しただけのかんたんな橋です。



3.舟 橋

舟をつないで造る橋です。洪水になると使えなくなります。



5.鋼製橋

鋼（鉄）で造りかなり丈夫なので、長い橋を造れます。



美々津橋

橋

の

発

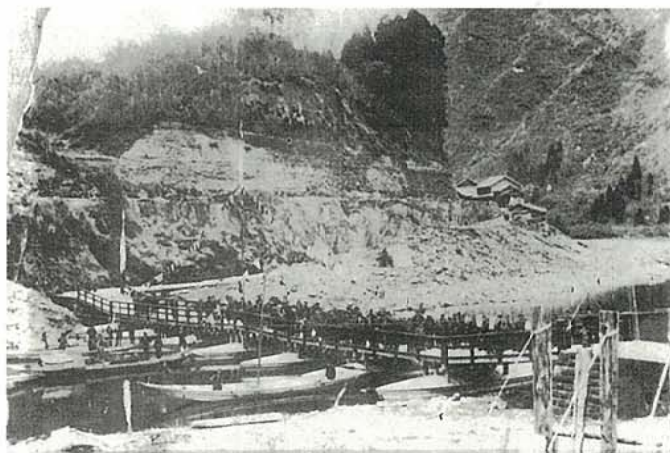
達

① 舟橋

大きな工事をしなくても、舟を利用して橋をかける方法もありました。

【3-2-(4)-①】: 舟橋は、橋のない川に舟を浮かべて、その上に板をおいて臨時の橋としたものです。洪水の時は切り離して岸につないでおきました。

右の写真は、東郷町舟戸付近に明治41年頃に造られていた船橋です。



② 眼鏡橋

明治の終わり頃に石造りの眼鏡橋が作られ、現在でもいくつか残っています。

【3-2-(4)-②】: 明治41年と42年に相次いだ台風で、流された木の橋にかわって石で作られたメガネ型の橋が作られました。現在でも、この眼鏡橋のいくつかは東郷町と西郷村などに残されています。



野々崎橋（東郷町・坪谷川）



瀬戸橋（東郷町・坪谷川）

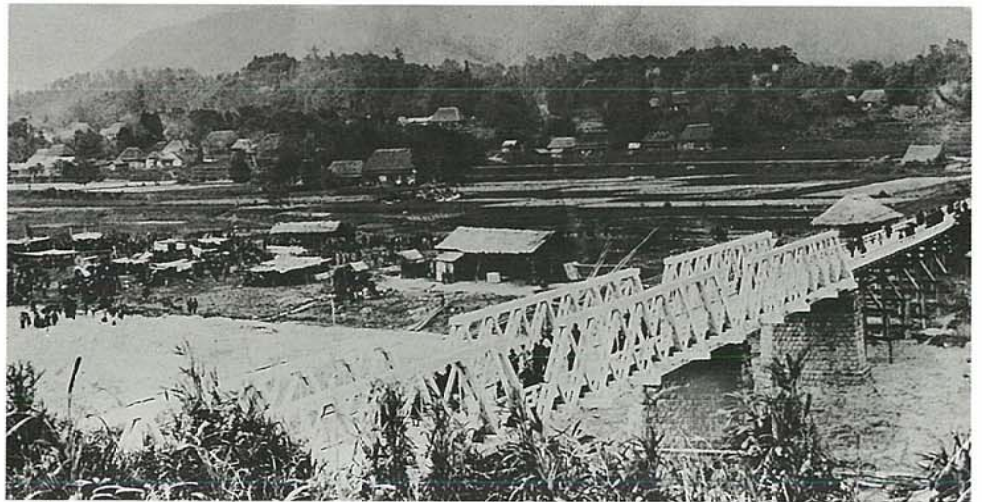


坪谷本村橋（東郷町・坪谷川）

③ 東郷橋今昔物語

東郷橋は、これまでに何回も作りなおされました。

【3-2-(4)-③】東郷橋は同じ名前で3回も作りなおされました。一番古い東郷橋は、明治43年に鶴野内と羽坂硯野の間にかけられた橋です。この橋は洪水で2回流されましたが、仮橋をつけて不便にならないようにしました。また、昭和10年に場所が上流に変わりましたが、この木でできた東郷橋も洪水で流されてしまいました。その後、舟を並べたり仮橋にしたり応急修理をした後で、昭和24年に現在の橋が完成しました。

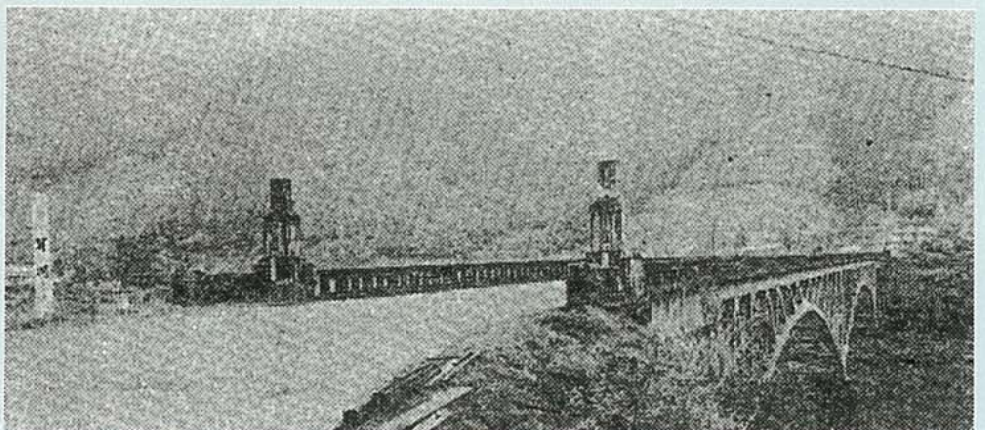


木製の時の東郷橋(明治43年)

④ 美々津橋

耳川河口には、それぞれの時代を代表する3本の橋が今でもりっぱに働いています。美々津橋はそのうちの1本です。

【3-2-(4)-④】耳川河口の上流側にかかれている美々津橋は、日向市が平成8年に市の有形文化財建造物に指定しました。また、美々津橋は、昭和9年の建造でスパンドレルブレストアーチとして現存するものの中では国内で最も古い橋の一つで、学術上も貴重な土木文化財です。この美々津橋をモデルとして、日之影町の青雲橋と槇峰大橋がかけられています。



美々津橋

3-3:洪水と人々の暮らし

(1) 洪水の記録

長年、耳川を利用してきた人は、今も昔も洪水の被害に苦しめられてきました。ただし、上流から材木や産物を流すのに、洪水の力を利用することもありました。

① 江戸時代におきた洪水

耳川ではむかしから大雨や台風による被害がありました。とくに、下流の人たちは大きな被害を受けることがあったようです。

【3-3-(1)-①】：今から300年ほど前の元禄6年6月25日に、台風による洪水で美々津の立磐神社の鳥居が倒れたと言われてい
ます。立磐神社は耳川の河口に近い南岸にありますが、この神社の鳥居が倒れたのですから、すごい大水だったはずですよ。

200年程前の寛政9年の台風では、殿様が宿泊する御仮屋が吹き倒され、180年程前の文化7年の大風雨では、美々津の下町が幅2間(約4m)、長さ176間(約320m)の大波でくずれ、2軒の家が壊れたと言われてい
ます。

嘉永3年8月6日、7日の台風での被害は大きく、お米はほとんど取れませんでした。さらに9月1日から大雨になり大水が出て荒谷地区で土砂崩れが起こったのを始め、被害は数えきれないほどでした。

一方、この地方では、昔から雨期の大水の勢いを利用して椎葉・諸塚地方の材木を美々津まで運んできましたが、下流の美々津付近に洪水があると木材は日向灘にまで流れ出たそうです。洪水も上流下流といった場所や時期によっては、つごう良くもなり悪くもなったわけです。



②近代の洪水

むかしから洪水の被害にあってきた耳川の人たちは、今でも台風などで大きな被害にあうことがあります。

●明治の洪水

明治の代表的な水害には、明治43年に起こった洪水があります。この洪水によって、耳川にかけられた木の橋の多くが流されてしまいました。

●昭和の洪水

入郷地域は地形的に風水害を受けやすく、台風や梅雨期の集中豪雨のたびに山崩れや崖崩れが発生し、建物や田畑がひどい被害を受けていました。「昭和19年9月18日の暴風雨で、耳川が一時のうちに増水し、笹陰の住家が4戸流出した。」「昭和29年6月8日に来襲した台風19号で耳川が増水し、笹陰の塩月嘉次郎宅が床上浸水したため、近くの公民館に避難した。」などの記録があります。

●平成の洪水

平成に入ってから、台風による集中豪雨のために、大内原ダムの下流区間で浸水被害がたびたび発生しています。特に大きな被害として、平成5年8月の台風7号による43戸の浸水、平成9年9月の台風19号による268戸の浸水などです。



平成9年9月台風19号による洪水



(2) 洪水と百姓一揆

むかし、洪水で作物がとれなくなった農民が、
集団で逃げようとした大きな事件がありました。

【3-3-(2)】：元禄のはじめ、延岡藩山陰地域(今の東郷町)で3年
続きの大雨で耳川で洪水がおき、2千石の美田はひどく荒れは
てました。農民は食べていけないほど大変でしたが、藩の役人は
それを無視し年貢を取り立てました。農民達は最後の手段とし
て1400人が集まり薩摩藩へ逃げようと、百姓一揆を起しました。
しかし隣の高鍋に出たところでつかまり、幕府評定の判決で農
民の代表は死刑になりました。藩主も越後の国(現在の新潟県)
へ転封させられるという大事件がありました。

※1 石:1石はお米の俵2.5個分(約150kg)。昔はお米の収穫量(石高)が領地の大きさ
や経済力を表していました。

※2 評定:現在の裁判所のようなもの。

※3 転封:治める場所を変えること。

山陰の百姓一揆記念碑



(3) 洪水による恩恵

洪水も悪いことばかりではなく、時には役に立つことがありました。

① 洪水による土砂の洗い出し（港がホゲル）

洪水で港の入口につもった土砂が流れるので、舟の出入りが楽になります。

【3-3-(3)-①】大洪水は、川岸に被害をおこしましたが、「適度の洪水」は美々津にとっては自然の港工事の代わりにもなりました。河口にたまり、舟の通行を邪魔していた砂が流れ去り港口が深くなるので、これを美々津の人は「港がホゲル」と言ってよこんでいました。



② 材木流し

大きな木材を流すために、洪水の力を借りることもありました。

【3-3-(3)-②】大きな木材は切り出したあと、川の中に「ツケ」において（止めておくこと）大雨を待ち、洪水の勢いで下流に流しました。また、海にまで流れ出た材木は、適度の波で近くの浜にうち上げられましたが、波が弱いと遠洋に流れていってしまい、行方不明になることもあったそうです。



3-4: 美々津の歴史

美々津は、神話の時代から大正時代まで、交通の要所として栄えた町でした。

【3-4】: 美々津は、神武天皇の大和東征船出の地として知られるように古いいわれのある土地で、漁業や農業がさかんであるばかりでなく、上方（現在の大阪・京都）との海上交通の要所として栄えてきた港町でした。明治時代の初めには、短いあいだですが県庁が置かれたこともあります。

昔の言葉に「高鍋で学者ぶるな、都農で喧嘩するな、美々津で小唄歌うな」と言うものがあります。文教の盛んな高鍋、馬の産地・交易地で力の強い人の多かった都農、それに上方文化の入口で芸も盛んだった美々津を、それぞれうまく表現したのですが、美々津と上方との交易が盛んだったことを伝えています。美々津の街並みは、江戸時代末期から明治・大正期に繁栄した港町としての面影を今でもよく残しています。

美々津の様子（大正～昭和初期）



美々津上町



耳川河口付近での潮干狩り風景



百町原の田植え風景（背後は松並木の街道【現在の国道10号】）

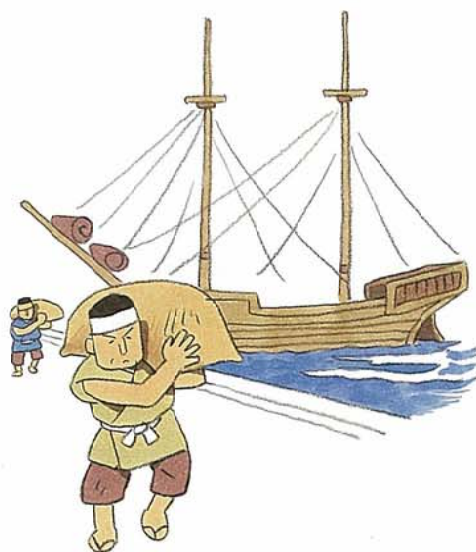


美々津町の全景（大正の頃）

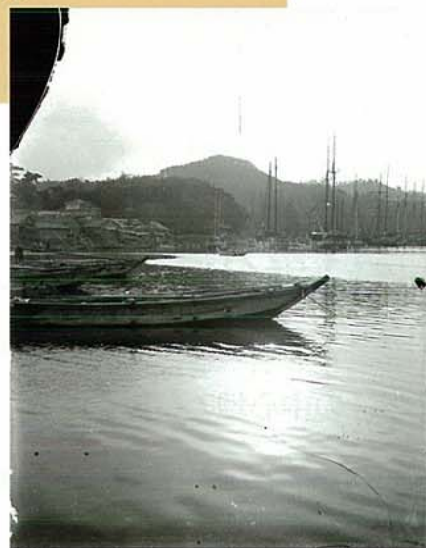
(1) 美々津港

美々津港は、荷物を積みおろす商港として、また、魚の集まる漁港としてにぎやかでした。

【3-4-(1)】：美々津港は耳川の河口にある商港として栄え、上流から送られてくる木材、木炭、椎茸など、林産物の積み出し港として機帆船の出入りが多く、いつも港内にはたくさんの船が泊まり、木材がイカダの形で浮かんでいました。また、近くに豊富な漁場があったことから、漁港としてもにぎわっていました。



美々津港の様子（大正の頃）



(2) 上方文化の影響

文化活動が盛んだった天領日向。その入り口は美々津の港でした。

【3-4-(2)】：天領時代（＝江戸時代）、文化創造の主役は平民でした。天領だった日向地方の文化も京都や大阪、江戸などの中央に比べると、やや遅くても盛んでした。

天領時代の日向地方の文化の一つとして、俳句があげられます。当時、日向国には延岡系の俳句と城ヶ崎系の俳句がありましたが、細島港や美々津港を経由して入ってきたものもありました。

※天領：朝廷の領地、江戸時代では徳川将軍の領地



(3) 美々津で唄を歌うな

むかしは流行の最新基地だった美々津。おしやれも歌もどこより新しかったようです。

【3-4-(3)】:「美々津は美人の産地だ」とか、「美々津で唄を歌うな」といった言葉がありました。美々津が上方文化を直接早くとり入れていたことを意味するものです。化粧品や髪飾りなど大阪直輸入だったことからおしやれは他の地域よりも早く、流行歌も若い船乗りがすぐ覚えてきてはやらせるため、美々津で古くなってしまった唄を歌うと恥をかく、という意味があったのでしよう。



(4) 美々津は県政の中心地だった

明治のはじめ、近代日本誕生の頃、美々津は「美々津県」の中心地でした。

【3-4-(4)】美々津には、明治4年7月の廃藩置県で新しく作られた「美々津県庁」が置かれ、一時、この地方の政治の中心地になりました。当初、日向の国は大淀川を境にして美々津県と都城県に分けられました。美々津県庁が最初に置かれた上別府の高台は、高鍋藩の殿様が宿泊する御飯屋が江戸時代に建てられた場所でした。その後、明治になって県庁が置かれましたが、この県庁舎は翌年、現在日向市役所が建っている富高に移されました。その3年後の明治7年には、この県庁跡を利用して美々津小学校が創立されました。この美々津小学校も昭和32年に移転し、現在は美々津地区公民館が置かれています。

明治6年、美々津県は都城県との統合により廃止されました。今は港の先の黒バエと呼ぶ岩礁に立つ「みひかりの灯台」と、美々津地区公民館にある「美々津県庁の跡」の石碑が、わずかに昔のおもかげをとどめているだけです。



当時の美々津県庁舎
※富高に移転後は美々津小学校として使用されました。



日向市美々津地区伝統的建造物群保存地区と
美々津県庁跡(黄色の範囲)



現在の美々津県庁跡
(現在の美々津地区公民館付近)



高鍋藩主御仮屋跡
(現在の美々津地区公民館付近)



旧美々津小学校の門柱
(現在の美々津地区公民館付近)



美々津県庁跡の石碑(現在の美々津地区公民館付近)

(5): 交通の発達

交通手段の発達にともない、海運の中心は美々津港から細島港に移っていきました。

【3-4-(5)】: 大正の初め頃までは、美々津港が入郷地域の物流の中心でありましたが、日豊線の開通や道路整備の進展によって、舟運の利用が少なくなり、海運の中心はしだいに細島港に移っていきました。

しかしながら、大正12年の日豊線全線開通により大消費市場へと直結され、物資が北九州や東京方面へも出荷されるようになりました。

また、「百万円道路」の開通により、木炭の生産が奥地にも拡大するなど、交通手段の発達が耳川流域の経済発展に大きく貢献しました。

※「百万円道路」: 耳川の開発の時に住友財閥により作られた道路。
詳しくは【5-1-(1)】: 「耳川の開発と百万円道路」をご覧ください。

日豊本線開通の歴史



日豊本線の工事の様子

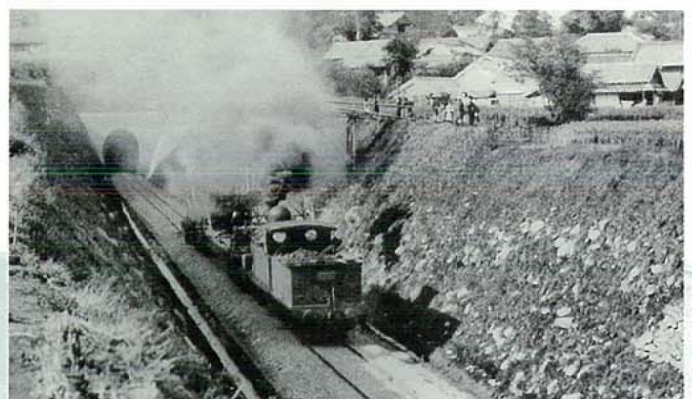
(美々津では大正7年に着工し、同10年に宮崎まで開通しました。)



工事中の鉄橋



完成した鉄橋



美々津トンネルの貫通



3-5: 耳川の二大決戦

(1) 大友、島津の耳川合戦

耳川は古戦場としても知られ、薩摩の島津氏と豊後の大友氏が戦い、大敗をした大友氏はこのために早くほろびたといわれています。

【3-5-(1)】: 天正6年3月大友宗麟は大軍をつれて日向に入り、島津軍側の松尾城をやぶりました。これにより門川城、日知屋城、塩見城、山陰城、田代城、神門城の北部地帯はすべて大友軍のものになりました。「美々津川を制する者は日向の国を制す」この言葉は天正年間に言われていた言葉です。その後、小丸川対陣の戦いで島津軍が優勢となり、逃げる大友軍を追って耳川にきました。高城と耳川の間7里(約28キロメートル)は倒れた兵で埋

まり、また、追いつめられて耳川でおぼれた兵もたくさんいました。この戦争で、豊後軍(大友)の戦死者は4000人になり、薩軍(島津)もまた3000人の戦死者を出したといわれています。敗戦を知った大友宗麟は、豊後に逃れました。その後大友軍の味方だった日知屋、門川、塩見、山陰、田代、坪谷、神門の各城主は皆、島津軍に誓いを入れ、島津配下となりました。後に耳川合戦と言われるのがこの戦いです。

びょうぶ
屏風に描かれた合戦の様子



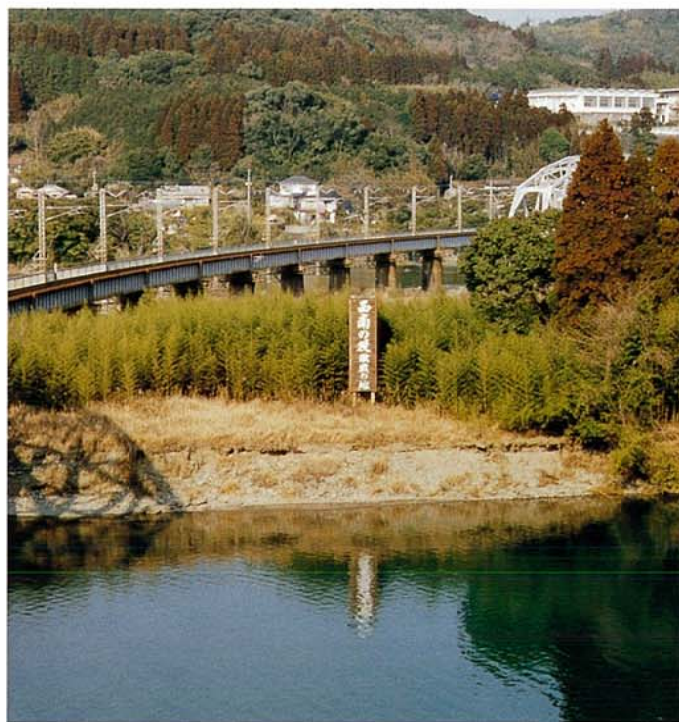
(2) 西南の役

大友・島津の戦いとあわせて「耳川の^{に だい けつ せん}に二大決戦」といわれるのが、薩摩軍と官軍の西南戦争で、封建（武士）社会から近代国家へかわる節目の戦いの一つが、くりひろげられました。

【3-5-(2)】：明治10年8月4日、耳川のあたりまで進出した官軍は、美々津、余瀬、宮ヶ原、横瀬と南岸8kmの間に大砲をならべ、美々津港沖からは3艦が船上から攻撃しました。北岸の薩軍は、耳川河口幸脇、笹野、飯谷、福瀬で敵を待ちました。また、耳川上流山陰地帯では、椎葉、米良方面より追撃してきた官軍が神門より坪谷へと薩軍を追ひ、耳川南岸まできました。薩軍は、山陰小野田で官軍の進軍を止めようとしてしました。

8月7日、官軍は北岸の小舟を手に入れて耳川を渡り、小野田で薩軍との本格的な戦いを交えました。山陰小野田の薩軍陣地は耳川戦線のポイントで、弾薬や食糧を集めた基地だったので懸命に戦いましたが負けてしまい、薩軍は基地を捨て門川方面へにげて、門川方面でまたさらにはげしい戦いとなりました。

和田の戦いで官軍と薩軍は、和田の渡しを中心に耳川をはさんで砲撃戦、銃撃戦を交え両方とも多数の戦死者を出しました。薩軍は8日耳川で敗れ、14日に官軍は延岡に進みました。この後、薩軍は延岡でも負け、遂に9月1日鹿児島へと帰りました。



「西南の役激戦の地」(耳川河口の中島)



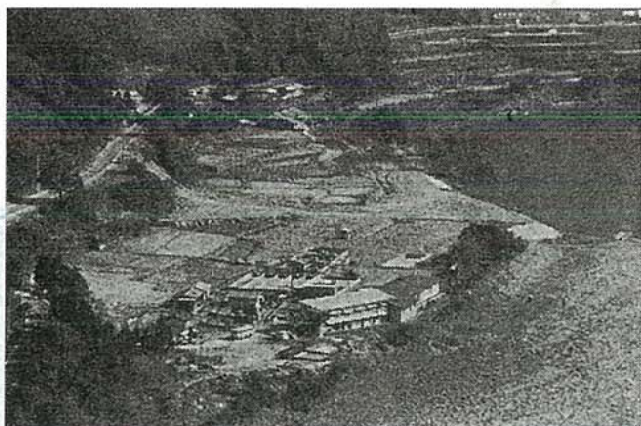
(3) 合戦にまつわる地名

耳川の近くには、古い戦争にちなんだ地名が今でも残っています。

【3-5-(3)】：耳川の古戦場にちなんで、「駒隠し」、「かち渡り」、「立花瀬」等の地名が残されています。なかでも「企みが河原」は、豊とみひでよし臣秀吉軍が九州征伐の時に氣勢をあげたところとして伝えられています。



駒隠し(現在の美々津橋付近)



企みが河原(現在の飯谷付近)



3-6: 植林の歴史

長く林業で栄えてきた耳川上流の地域では、木を切るだけでなく木を植える植林が行われてきました。

【3-6】：藩政期は、延岡藩では広大な山林があるにもかかわらず、大規模な造林の事例はなくスギ等の美林は見られず、木炭とシイタケが代表的な産物でした。

17世紀中頃、山陰一揆の悪役とされた代官梶田十郎左衛門は、植林を強要しました。植林は米作りのじゃまになるという考えから、農民が逃げ出す原因になったと言われてしています。このスギ造林が藩政の中で最初の造林の記録です。

この地方は、明治前期の官林引上げはほとんどなく、ほぼ全域が民有地として残されていました。しかし、明治末期には造林の大切さが言われるようになり、日露戦争記念造林や公有林造林などが盛んに行われ、このころから造林面積もようやく増えはじめました。

大正期には原野・荒地・低質広葉樹林としてそのままになっていた山林を村有林として整理し、官行造林も導入して積極的に造林が取り組みられました。

大正6年、椎葉村でもようやく本格的な造林が始まり、住友吉左衛門は椎葉村に1万町歩の造林を計画しました。

昭和初期になり、各地にオビスギ・ヒタスギ・オグニスギ等優良品種を植える実験も行われました。

このように昭和の戦前期までは、村や国、個人の財産として木を植えることはあっても、組織的な大造林はあまり見られませんでした。

昭和30年頃になるとようやく平和になって、あまり使われない炭用の木から高く売れる建築用へ切り替えようという計画が高まってきました。国・県の主導による拡大造林の計画が出されると、この周辺でも積極的に木を植えました。

この辺りは古くから水害が多発し、大きな災害を受けていましたが、森林をふやすことで山地・河川の防災効果も期待されました。

※町歩: 広さの単位、1町歩は約1ヘクタール



諸塚村のスギ植林



木材の伐採用具と製材用具(宮崎県総合博物館展示)

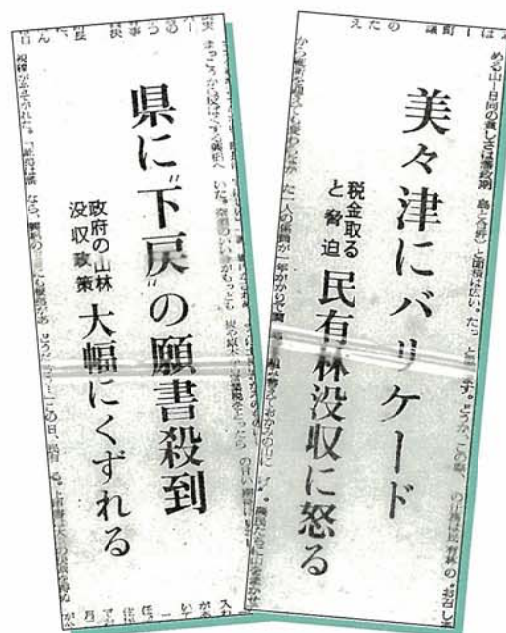
林務調査官一行を耳川で阻止

明治18年頃、政府は明治維新以後の藩籍奉還を進める一方で、官有地の区分を調査していました。宮崎県には明治21年に林務調査官の一行が来県し、山林を政府の所管に移すよう県民に説得しました。

この時、小林乾一郎翁は、山林資源が豊富で民有地の多い県北では、これを国有とすることは住民の利害に大きな影響を持つことを憂慮しました。そこで、調査官の県北入りを拒否しようと、郡長の原時行らに相談し、郡民と共に結集し、反対運動に立ち上がりました。郡民から全権を委任された翁は、調査官一行の県北入りを耳川兩岸にとどめ、さらに政府の要路に陳情するなど、はげしい反対運動を展開し、ついに郡民の希望をかなえることに成功しました。

※要路:重要な地位の人

当時の毎日新聞の見出し



小林乾一郎翁の像



3-7: 漁業の歴史

(1) 食生活と川魚

流域に暮らす人々は、耳川と支川から水を引いて田をひらき、畑を耕し、川魚の漁などをして食糧を確保し、耳川の恩恵を受けながら生活してきました。耳川の川魚では鮎が有名だったのですが、昔は自家用だけではなく、東京や遠くは中国の大連まで出荷され、地域を代表する特産物として重宝されていたということです。



【3-7-(1)】: 交通機関が発達していない時代は、海産物の魚は塩物^{しよくりよう}が中心で、「唐人干し」などの乾物^{かんぶつ}が主で生魚を食べることができたのはまれでした。村人たちの栄養としてのタンパク源は、もっぱら川魚が狩猟による獲物で、川魚の中でも最も重宝されたのは鮎^しでした。自然遡上^{しぜんそじよう}していた鮎は、上流の椎葉村にまで遡上し、椎葉村史によると、明治40年の椎葉村での鮎の漁獲高は3,105貫^{かん}（約11,640kg）と記録されています。

また、明治12年前後の山陰村、坪谷村、八重原迫野内村での農暇工^{のう か こう}の戸数は右の表の通りです。

明治12年前後の農暇工戸数と漁獲高

村名	農暇工戸数	鮎の漁獲高	河川名
山陰村	19戸	3万匹	耳川本川
八重原迫野内村	5戸	1万匹	耳川本川
坪谷村	5戸	5千匹	坪谷川

※1貫:1貫は約3.75kg

※2農暇工:農業をしながら夏期には川魚漁で生計を立てる人

(2) 川魚の漁法

【3-7-(2)】: 古くから行われてきた漁法に鮎築漁^{あゆなりよう}があります。これは鮎が産卵のために河口に下る9月下旬以降に川に築をつくり、下り鮎をとるものです。築には「本築方式」と「土佐築方式」がありますが、流れの速い耳川では、川を斜めに堰切^{やな}ってかける「土佐築方式」が多かったようです。

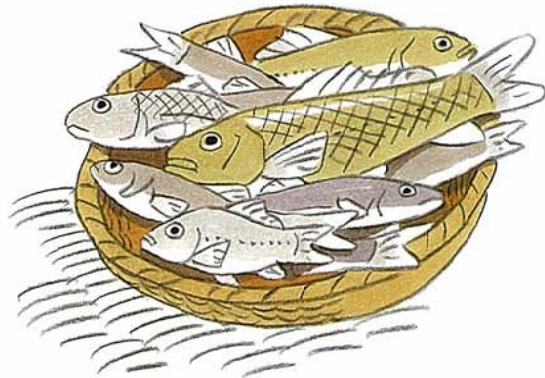
また、その他の鮎の漁法には罎掛け^{おとり}（友釣り）やチョン掛け、サビキ掛漁、濁りすくい漁などがあります。詳しくは【6-3】:「耳川の幸」をご覧ください。



(3) 鮎の商品価値と消費

【3-7-(3)】: 鮎は香魚または年魚とも呼ばれます。耳川は流れの中に急流や淵、瀬が多く清流であったため、川苔をえさにする鮎が良く育ち、上流にいくほど成長が良く商品としての価値が高かったようです。

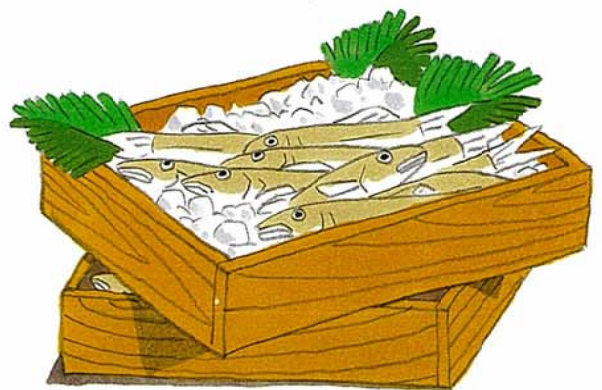
川魚のうち、鮎を除いてほとんど自家用として消費されていましたが、鮎は生鮎や焼鮎として村外にも出荷販売されていました。自家用としての鮎は、内臓物を抜き、火で炙り、乾かして冬の保存食として、「だし」や「昆布巻」、「甘露煮」などの材料に使われ、重宝な食べ物の一つでした。特に、10月以降に築に落ちる鮎は卵をもっており、あぶらがのって美味だったそうです。



川魚の消費高の記録(明治41年「村是」より)

種類	消費高	当時の価格
鮎	9,600貫(36,000kg)	9,600円
ウグイ(イダ)	500貫(1,880kg)	300円
鰻(ウナギ)	1,250貫(4,690kg)	1,250円
鯿(ボラ)	100貫(375kg)	100円
雑魚	1,500貫(5,630kg)	600円

※記録の消費戸数は1,244戸 ※1貫は約3.75kg



また、昭和初期の東郷村(現東郷町)山陰又江野では、「鮎文」の屋号で佐藤文治郎という人が手広く鮎取引をしていました。当時は、東郷村や西郷村、諸塚村、椎葉村で鮎の買付けを行い、糞出しを行ってから二重の特別な箱に氷詰めにして、東京築地の魚市場や日本橋の料理店、岐阜県などに出荷されていました。遠くは門司から中国大連まで販路を広げていました。このほか、おなかに卵をもった鮎からつくる「うるか」や焼鮎も好評だったそうです。



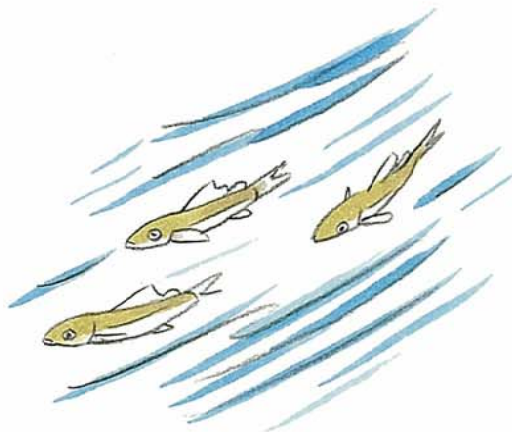
(4) ダムの建設とその影響

【3-7-(4)】: 耳川は水量が多く、^{けいこく}渓谷型の河川の特徴があるため、^{でんげんかいはつ ちたい}県下有数の電源開発地帯として注目されていました。昭和4年に耳川にはじめて西郷ダムが建設されてからは、現在までに8箇所にダムが建設されています。

耳川の鮎は東京その他の地域に送られ、大変好評でした。

しかしながら、ダム建設により、川の流^せれは堰き止められて川魚^{そじょう ぎよどう}の遡上は魚道^{ぎよどう}のみに頼ることとなりました。

このため、昭和4年には、美々津町^{よせ}余瀨（現日向市）と対岸の岩脇^{さいわき}幸脇（現日向市）に住む漁業関係者が、河川漁業では生活することができなくなったと県に^{ちんじょう}陳情し、^{てんぎようしきん}転業資金を^{ばいしきん}賠償金として住友から^{ほしやう}補償してもらうよう要求しました。



(5) 県営東郷養魚場の設置

【3-7-(5)】: 昭和2年に、住友から出されていた耳川の水利権^{すい りけんしん}申請^{せいしん}が許可されました。その際、住友は^{ぎよぎようほしやう}漁業補償として、^{ようぎよ}東郷養魚場^{き ぞう かい}を県に寄贈し、昭和6年に建設されました。ここでは当初、^{ち ぎよ}稚魚12万尾を「放流用」として生産していましたが、その後、「放流用」と「養魚用」の両方の生産を目的とし、耳川だけでなく県北一帯の供給地となりました。養魚池は18面設置され、その広さは全体で1,191.6坪（約3,930m²）もありました。

この県営の養魚場は、昭和38年に廃止され、耳川水系管理委員会に県から^{はらいさ}払下げられましたが、昭和51年に東郷町の耳川漁協^{いじやう}に移譲され、翌年東郷町に^{ぞう ち}贈与されました。



(6) 漁業協同組合の設立

【3-7-(6)】:昭和24年に水産業協同組合法が施行されたことにより、知事の認可を受けた漁協(漁業協同組合)が誕生しました。また、昭和27年に大内原ダムが建設されることになり、漁業に関する諸問題を協議するために、余瀬飯谷漁協(現日向市余瀬、飯谷)、耳川漁協(現東郷町)、西郷漁協(西郷村)、諸塚漁協(諸塚村)が連合して「耳川水系漁業協同組合連合協議会」が設立されました。また、昭和38年には美幸内水面漁協(現日向市美々津、幸脇)と椎葉漁協(椎葉村)が加盟し、6漁協で耳川水系管理委員会が設立されました

耳川の漁業協同組合の管理区域

組 合 名	管 理 区 域
椎葉村漁業協同組合	椎葉村行政区域
諸塚漁業協同組合	諸塚村行政区域
西郷漁業協同組合	西郷村行政区域
耳川漁業協同組合	東郷町行政区域
余瀬飯谷漁業協同組合	東郷町行政区域より下流田代ヶ原小谷尻より高見ヶ浜堤防頭見通し線
美幸内水面漁業協同組合	田代ヶ原小谷尻より高見ヶ浜堤防頭見通し線より下流美々津大橋の下流



4. 川と文化人

4-1: 歌人・詩人 — (宮崎県教育委員会教育研修センター: 伊藤一彦先生)

耳川の流域からは若山牧水や小野葉桜など、歴史に残る歌人が生まれています。また日向にはいろいろな文化人が訪れています。

(1) 若山牧水

若山牧水といえば、日本を代表する歌人です。その作品は多くの人々に愛され、口ずさまれています。

[4-1-(1)]

幾山河越えさり行かば寂しさの
終てなむ国ぞ今日も旅ゆく
白鳥は哀しからずや空の青
海のをにも染まずただよふ

日本の名歌といわれる作品です。この名歌をつくった牧水は、東郷町の坪谷に明治18年に生まれました。今日でも保存されている生家の前には美しい溪流、つまり坪谷川が流れています。牧水は「おもひでの記」のなかで次のように書いています。

「家は村を貫通する唯一の道路に沿ひ、真下に溪に臨んで居る。そして恰度その溪は其処まで長い滝のようになって落ちて来た長い長い瀬が、急に其処で屈折して居るために其処だけ豊かな淵となり、やがてまた瀬となつて下り走り、斜め右と左とに未遠くその上下の溪を展望する事ができる地位にある。」

牧水の家は川を楽しむのにじつに良い場所に立っていたのです。少年時代の牧水はこの坪谷川で魚をつかまえ、夏は泳ぎました。そして、川のむこうには尾鈴山が見えました。牧水は晴れた日の尾鈴山も好きでしたが、雨の日の山の眺めがとくに気に入っていました。雲のかかった山、雨のために小さな滝のできた山を倦きず眺めていたそうです。

牧水の生家



若山牧水

牧水は心から水を受した歌人でした。牧水は本名を繁^{しげる}といますが、ペンネームの牧水にはちゃんと「水」の字が入っています。

「私はものごころのつく頃から痛くこの溪^{たに}と山の雨とを受した。で、歌の真似^{まね}などを始め出して雅号^{がごう}というものを使[※]ふ様になると先づ雨山^{うざん}と称したものであつた。白雨^{はくう}とも云つた。現^{げん}に使つてゐる牧水といふのも当時最も愛してゐたものの名二つを繋ぎ合わせたものである。牧はまき、即ち母の名である。水はこの溪^{たに}や雨から来たものであつた。」

やはり「おもひでの記」の一節です。牧水はふるさとの川、ふるさとの水に、身も心も育てられました。日本を代表する歌人となった牧水の文学者としての豊かな感性^{かんせい}の奥底^{おくそこ}には、ふるさとでの自然体験があるのです。ですから、牧水自身、ふるさとの川や山のことを一生忘れず、繰り返し歌ったり、書いたりしています。

ふるさとの尾鈴^{おすず}の山のかなしさよ 秋もかすみのたなびきて居り

歌集『みなかみ』に収められている、28歳の時の作です。父の病気のため、東京からふるさとに帰ってきた時に歌いました。「かなしさ」は「悲しさ」と「愛しさ」の両方です。

あたたかき冬の朝かなうす板の ほそ長き船に耳川くだる

歌集『砂丘』の作で、父の病気のためふるさとに帰ってきた翌年の作です。たよりないように見える船を楽しみながら、耳川をなつかしんでいる気持がよく出ています。

幼き日ふるさとの山に睦^{むつ}みたる 細溪川^{ほそたにがわ}の忘れぬかも

歌集『さびしき樹木』に収められている、33歳の時の作です。幼い時に親しんだ山や川が忘れられないと歌っています。このころ東京に住んでいた牧水は心が寂^{さび}しい時にはよくふるさと思つては自分を慰^{なぐさ}めました。

ふるさとの日向の山の荒溪^{あらたに}の 流清うして鮎^す多く棲みき おもほへば父も鮎をばよく釣りき われも釣りにきその下つ瀬に 鮎焼きて母はおはしきゆめみでの 後もうしろでありありと見ゆ

牧水が昭和3年に世を去った後に出された『黒松』の中の歌です。ふるさとの川で父といっしょに鮎を釣ったこと、母がその鮎を焼いてくれたこと、その母の後姿まではつきりおぼえていると歌っています。そんな光景を夢にまで見たのです。牧水の心の中にずっとふるさとがあったことがよく分かります。

若山牧水記念公園(東郷町)



(2) 小野葉桜

小野葉桜は若山牧水とちがって歴史のなかに埋もれて忘れられていた歌人でした。しかし、昭和62年に遺稿歌集『悲しき矛盾』が出版されて、その悲劇の人生と優れた作品に大きな注目が集まり、今ではよく知られた歌人になりました。

【4-1-(2)】葉桜は西郷村の田代に明治12年に生まれました。耳川のほとりの家です。向学心の強かった葉桜は小学校を卒業すると、延岡の学校に勉強に行きます。その後、美々津小学校や田代小学校の代用教員をしていましたが、さらに勉強するために上京しました。しかし、日露戦争が始まり、勉強を中断して帰らざるを得なくなりました。

葉桜は西郷や美々津でいろいろの事業や社会活動を行い、郡会議員にも若くして選ばれました。しかし、事故のため病気となり、議員を辞職せざるを得なくなりました。また不幸が起ったのです。

仕事ができなくなった葉桜は妻の収入に頼って暮らすようになりました。そのことを申しわけない、情ないと思う葉桜は10代のころに親しんだ短歌の創作にはげみます。じつはそのころから若山牧水とは文学上の親友でした。

狂ほしきまで心地よき夕べかな

渚に雨のふり消ゆる音

濃きむらさきに波立てる海よ

冬の陽のあまりに明るし我が窓のまへに

ぼんやりと暮れかかる海に向ひ居れば

母の懐ろが恋しくなりけり

葉桜が美々津の海岸を歌った作品です。雨の海を好み、明るい海はまぶしいと歌っています。そして、海にむかっていると、ふるさとの母が恋しい、と。



初冬の山路さびしみ一夜ふた夜
母待つ家に寝にかへるなり
久しぶりに家にかへりて
父上の墓前にちつと目を瞑ぶり居り

葉桜は耳川のほとりのふるさとを愛し、耳川の流れ出ていく美々津の海岸を一生愛した人でした。葉桜の短歌創作は病気の悪化のため短い期間でしたが、その悲劇の人生から生まれた作品はいま多くの人の心をとらえています。

どどと狂ひて岩窟に浪はまきかへる
かくあれかくあれころおびえず

『悲しき矛盾』の終りにある一首です。私たちに勇気をあたえてくれる歌ではないでしょうか。



(3) 高森文夫

高森文夫は東郷町に生まれた優れた詩人です。そして、日本的に優れた詩人であるのにその業績はまだ十分に知られていません。本人が自分の詩業を語らず、東京から遠く離れたふるさとで生活していたためです。今後の顕彰が待たれている詩人です。

【4-1-(3)】高森文夫は明治43年の生まれです。同じ東郷町出身の若山牧水とは25歳ちがうということになります。少年時代から文学に熱中し、延岡中学(今の県立延岡高校)を卒業すると、上京して成城高校に入学します。そして、ふとしたきっかけで詩人の中原中也と出会い、フランス文学をすすめられて、東京大学の仏文科に入学します。大学卒業後は母校の延岡中学の教壇に立つなどしていましたが、昭和12年に第1詩集『浚渫船』を出版しました。この詩集には名誉ある第2回中原中也賞が与えられました。第2次世界大戦の激化していくなか、昭和19年には召集となり、満洲の部隊に入隊しました。敗戦後はシベリアに送られて収容所で苦しい強制労働の日々を過しました。日本に帰ることができたのは昭和24年でした。

戦後は宮崎県教育委員、延岡市教育長、東郷町教育長、東郷町町長などの要職にありましたが、その清廉な人格は全幅の信頼を置かれていました。もちろん、戦後も詩人としての心と志を失わず、昭和43年には第2詩集『昨日の空』、平成2年には全詩集と言っていい『舷灯』を出版しています。惜しまれながら平成10年に亡くなりました。

現代を代表する歌人で中原中也研究家である福島泰樹さんがいま高森文夫に関心を寄せ、多くの文章を書き、注目を集めています。

最後に、高森文夫がふるさとと牧水について述べた文を引いておきます。

「昭和13年、牧水の没後10年目に出版された牧水最後の歌集『黒松』を私が手にしたのは旧満洲国新京の空の下であった。満蒙の荒涼たる乾燥地帯の明け暮れに、いつも慕わしく思い出されるのは四季それぞれの風情をもって降る日本の雨の音であり、枕に通うのは故郷のわが家のすぐ裏を流れる耳川の昼夜を分かつぬせせらぎの響きだった。

そんなとき行きつけの本屋の店頭で見つけたこの歌集は、まさに遠く離れた故国の懐かしい雨の訪れのように思われた。ことに「ふるさとの日向の山の荒溪の流清うして鮎多く棲みき」に始まる牧水が遠い少年の日を懐かしんで歌った一連の「鮎釣りの思ひ出」の歌は、そのまま私自身の少年の日の思い出であり、『くろ土』から『山桜の歌』を経た牧水の闊達自在な歌声に、私は夏の日の夕立の雨に心身を洗われたような爽快さを覚えた。」(『満洲の空の下で』)

散歩路

遙けくも われはきにけり

朝夕を 通ひなれたる

吾子とゆく この散歩路

あかねさす 夕焼の空

黍の穂の 色も熟しぬ

吾子とゆく この散歩路

朝夕を通ふ 細徑

遙けくも われはきにけり

吾子の背を かくすばかりに

茂りたる 千草八千草

愛しさの つともせまりて

赤まんまの 花手折りやる

遙けくも われはきにけり

吾子とゆく この散歩路

あかねさす 夕焼の空

『散歩路』(高森文夫詩集「昨日の空」より)

4-2: 耳川の流域を訪れた文化人

郷土の歌人のほかにも、自然の美しさや豊かさにひかれて、この美々津に来た詩人や民俗学者たちがいきました。

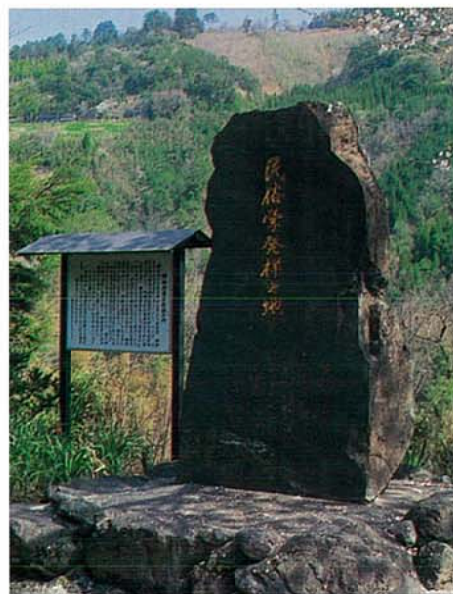
(1) 柳田国男

柳田国男は民俗学の創始者といわれ、明治41年に椎葉村を訪れ、椎葉のようすを作品で広く紹介しています。

【4-2-(1)】: 民俗学の基礎を築いた柳田国男は、明治8年に兵庫県に生まれました。明治41年に椎葉の村を訪れ、狩猟を中心とした椎葉の生活民俗を記録した『後狩詞記』をまとめ、この本が日本の民俗学研究の最初の本となりました。その『後狩詞記』に柳田国男は次のような短歌を記しています。

立ちかえり又みみ川のみなかみに
いほりせん日は夢ならでいつ

耳川のみなかみの椎葉をもう一度また訪れたいという歌です。



柳田国男の顕彰碑

(2) 中原中也

中原中也は30才という短い生涯の間に、東郷町山陰を3度も訪れています。

【4-2-(2)】: 近代の代表的な詩人で、その詩が今日も広く愛され読まれている中原中也は、明治40年に山口県に生まれました。中原中也は東郷町を3度訪れています。それも昭和7年、9年、11年と集中的にです。文学上の親友である東郷町の高森文夫を訪ねてでした。2人は東京で知りあい、熱く文学を語りあう仲間でした。中原中也は夏休みに故郷の山口に帰った時に、わざわざ宮崎まで足を運んだのです。中原中也は高森文夫が後に詩集『浅瀬船』を出版した時、紹介文を「四季」に記していますが、その中に次のような一節があります。

「僕は高森のことを想ふと、いつも一匹の美しい仔熊を連想する。今日も彼は紺の背広を着て熊のやうにしづしづと南国の夏の町を歩いてゐるのであらう。」

(3) 野口雨情

野口雨情は茨城県出身で、大正中頃の民謡・童謡作家です。「城ヶ島の雨」「波浮の港」「十五夜お月さん」「はとぽっぽ」などの歌は今も有名です。

【4-2-(3)】：雨情が日向市を訪れたのは、昭和17年4月です。宮崎県下の雨情の民謡をたどり、列記すれば、次の通りになります。「高千穂町」「岩戸町」「延岡小唄」「延岡」「日向音頭」「富高歌謡」「美々津」「日向炭焼節」「真幸村歌」「小林」「小林にて」「原町」「高原」「宮崎」「都城小唄」「飫肥」「ペンコ節」「油津」などの作品です。

雨情の詩作ノート「旅の風草」に「美々津」と題する作品の一節を紹介します。

日向灘から朝日がのぼりや
千里奥山夜があける
日向美々津は船出の遺蹟
ここは海軍発祥地



他に、第一回文化勲章を受章した、佐佐木信綱をはじめ、木下利玄、川田順などの歌人が耳川流域を訪れ、作品を残しています。

5. 水利用の歴史

5-1. ダムの建設

(1) 耳川の開発と百万円道路

耳川の開発にあわせて作られた道路のおかげで、山奥の村などは自給自足の生活から物売り買いする生活に変わりました。

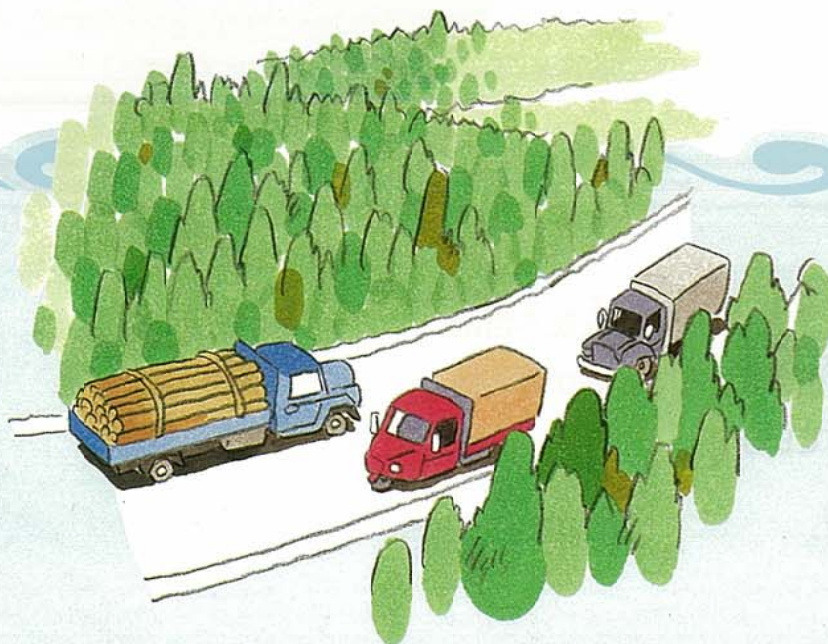
【5-1-(1)】：財閥・住友吉左衛門は、椎葉に水力発電所を作る計画を立て、その権利を得るために宮崎県に申請をしました。宮崎県は、今まで山奥の産物を運ぶのに川流し、舟筏、高瀬舟だけに頼っていたので、この不便さと山の開発を一度に解決するため、水利権と百万円道路開設を許可することにしました。当時、椎葉～細島間の県道は西郷村和田まで整備された後、中断されたままであり、車の通行可能な道路の整備は椎葉村民の願いでもありました。

また、それまでは、人の力だけで椎茸やお茶を運んでいましたが、耳川のダム開発により舟に代わってトラック輸送が主流となりました。その結果、輸送にかかるお金が安くなり、スピードアップしたため、各地の木炭と木材の生産量増強にもつながりました。このように、「百万円道路」の開通は、上流地域の生活を自給自足型から商品経済型へと変化させていきました。

※自給自足：自分の必要なものを自分の所でまかなうこと



ダム建設当時の様子



【住友の山林経営について】

大正7年、宮崎県は広大なる奥地山林開発の為、住友に椎葉村で造林事業を行うよう要請し、更に椎葉村長が土地提供についても案をもって上阪しました。幸い、時の住友総理事鈴木馬左也氏は高鍋町の出身(旧秋月藩家老の家系)で、宮崎県耳川発電事業水源涵養の為に椎葉村との交渉は急速に進展することになりました。しかし、当時の椎葉村は僻遠の地であり、一般には造林事業など考えも及ばなかったのです。当時、椎葉にはいるには、ただ、二つの道筋に限られていました。一つは、人吉→湯前→古屋敷→小崎→上椎葉で、もう一つは、高森→馬見原→国見峠→十根川です。大正8年、住友に招かれて椎葉に赴任した秋田営林局技師澤田修蔵氏は、人吉からのルートを馬で、妻は駕籠にのせられ峠を越えて椎葉に着任されました。その昔、那須の大八郎は高森からの道で、椎葉に攻め入ったと伝えられています。

当時は「住友が、山に樹を植える」と地元の評判になって早朝より事務所の前に大勢の造林人夫が列をなしました。「今日はここまで」と言ってお断りするのに困ったと、故人の昔話を聞いたことがあります。

【住友の100万円道路について】

当時、九州送電(株)(現在の九電)と深い係わりのあった住友が、水利権の代償として工事費を寄付することによって、二間幅の道路が完成しました。当時における山間道路としては、全国でも稀に見るもので、当時の百万円は現在では数百億円を超える金額であろうと想像されています。

時は流れ、文明開化の足音高く、日豊線と百万円道路との開通によって、耳川文化の流れも大きく変貌を遂げることになったのでしょ。この工事は昭和3年3月1日に住友の手で着工、同年11月より県に引き継ぎ、同7年に竣工しました。満4力年余りを費やしたわけで、西郷村古川から椎葉村下椎葉間47キロ500メートルに及び、そして昭和8年にさらに上椎葉まで延長されました。かくてこの道路が完成すると、バスが乗り入れられ、トラックが入り、椎葉村の交通は全く画期的な進展をなしました。

当時の大阪毎日新聞で紹介された記事は次のとおりです。

『天下の富豪住友家がボンと投げ出した一百万円也の寄付金で、昭和3年着工した県道椎葉細島港線、俗にいう百万円道路は目下工事中の奈須橋の工事を残して全部完成した、かくして中古以来の謎と伝説と宝庫とを秘めている日向のチベット椎葉村の神秘の扉は開かれた。記者は新しく文明の光に浴したこれらの地方を紹介すべく栗の花咲くこの処女道を訪れた。

あたらしく出来たいわゆる百万円道路は東臼杵郡西郷村古川から西臼杵郡椎葉村の村役場所在地地上椎葉にいたる十一里の県道で昭和3年着工以来満5力年を費やしただけに県下第一を誇る立派な道路で、新道には坂というもの一つもなく、低のように平坦な道が耳川の流れに沿うて新緑の山際にまるで博多帯をしめたようにどこまでも続いている。

これを暫く一人が通り得る旧道が山の嶺から谷に下り丸木橋を渡ってまた山の頂上に登っているのと比較すると全く隔世の思いがする。

椎葉村は人も知るように寿永の昔壇の浦に敗れた平家の残党が隠れ住んだところで扇の的で有名な那須与一の弟那須大八郎が追討の命を受けて入山し平家の娘との間に織りだした恋物語りなども伝えられている。旧道はこの時以来の山道で勿論その後回収されたであろうが、古代の遺物そのまま道というのは名ばかりでまったく谷のようである。

ところが今度出来た新道は1933年の最新式ともいうべき道路で、橋は全てが鉄筋コンクリートまたは鉄橋で架せられ、現代科学の粋を尽くしているだけその美観と堅牢とはかういう山間の道としては全国にも稀なほどのものである。だからこの新旧両道を比べて見ると誠に興の多い色々なことを考えさせられる。それだけにこの道路の開通はこの山村に悲喜色々な出来ごとを生みだしている。』

(2) 八重原の渡し

百万円道路の工事によって、渡し船だけで行き来していた地域に初めて橋がかけられました。

【5-1-(2)】：百万円道路は古川から椎葉までとなっていましたが、八重原の渡し場をこえるため、渡し場の上手に吊り橋をかけました。この橋は最初、昭和3年にかけられ、昭和18年の大洪水で流失しましたが、仮橋と渡し舟でどうにか通れるようにしていました。その後、昭和24年に現在の八重原橋がかけられました。



現在の八重原橋



(3) わが国初のアーチ式ダム（上椎葉ダム）

大量の雨とV字型地形で、水力発電を行うのにふさわしい場所だと早くから知られていた耳川上流。昭和30年に完成した上椎葉ダムは、わが国最初のアーチ式ダムです。

【5-1-(3)】：九州の屋根といわれる椎葉が、平地の農村部と大きくちがうところは、年間2,500ミリ前後も降る雨と、V字型の谷の地形でしょう。

そのため、水力発電に合う場所だと早くから知られ、いくつかの大規模なダムが建設されています。昭和30年に完成した九州電力の上椎葉ダムは、わが国最初のアーチ式ダムとして知られています。発電所の出力は9万キロワットで、ダムの高さ110メートル、長さは341メートル、湖水面積は約266万平方メートルもあります。昭和25年から約5年の歳月をかけ、延べ500万人の人がこの工事に携わりました。完成までに要した工事費は149億円でした。

※アーチ式ダム：堰堤の形が弓形をしたダム



上椎葉ダム



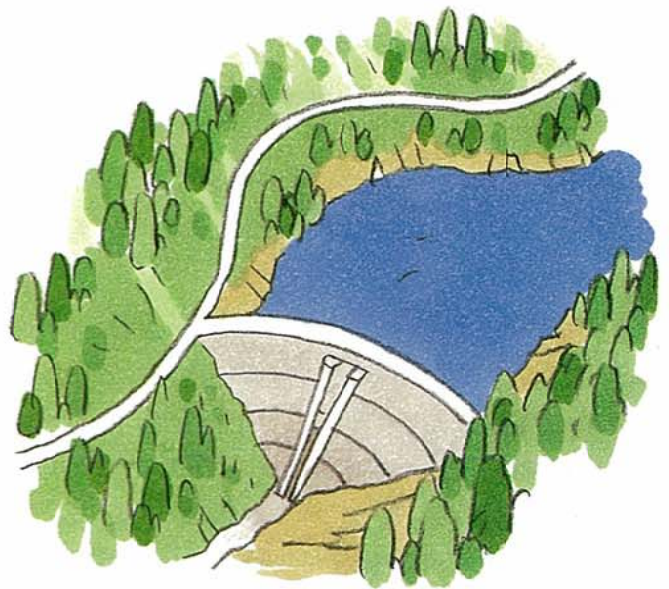
椎葉夏祭り



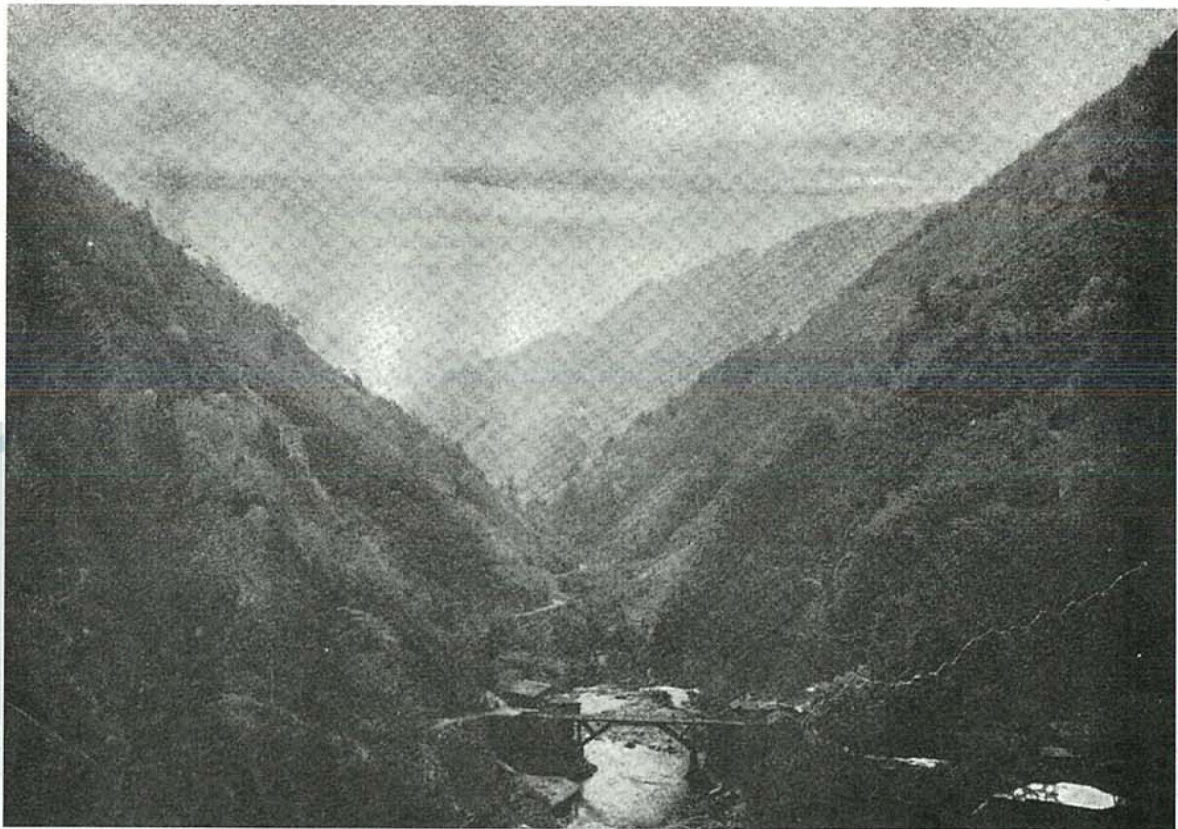
(4) 上椎葉ダム建設と地域の変化

ダム工事によって人が次々とやってきて、椎葉はにぎやかな町に変わりました。完成までの5ヶ年余りの間に、延べ500万人もの人がやってきたということです。

【5-1-(4)】：山深い椎葉の里は、昔は静かであまり変化のないのんびりした所でしたが、工事が始まるとダム建設の仕事をする人が次々とやってきて、新しい住宅が建てられたり、いろいろなお店が増え、にぎやかな町に変わりました。完成までの5ヶ年余りの間に、延べ500万人もの人口流入があったことからしても、当時の変わりようは大変なものでした。当時、上椎葉には銀行や警部派出所が置かれ、映画館も2ヶ所、またパチンコ店なども出現しました。また、カヤ葺き屋根が文化住宅になり、村役場は鉄筋3階建てに改築され、モダンな円形建築の中学校寄宿舎も建ちました。



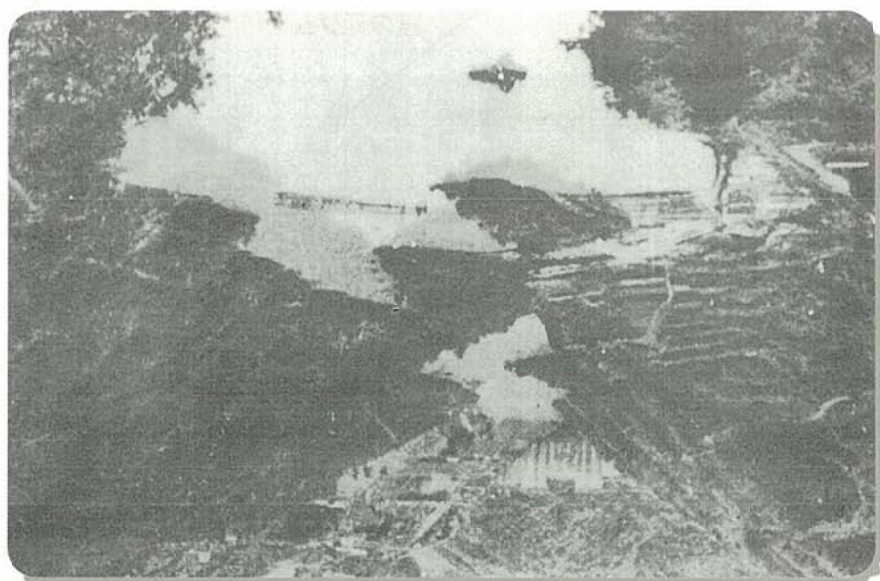
上椎葉ダム建設前のようす





上椎葉ダムで水没する
椎葉村・尾八重小学校での
最後の運動会(昭和27年)

上椎葉ダムが
できる直前の
人々の暮らし



湖底に沈んでゆく民家や田畑
(昭和30年頃)

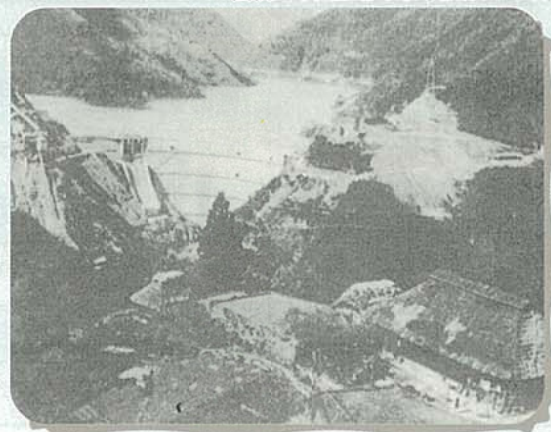


建設作業員の宿舎が
立ち並ぶ夜景
(昭和28年～30年頃)

水没前の尾八重地区(昭和27年頃)



当時の最先端技術を集めたダムと
伝統的な藁葺きの家(昭和30年頃)



(5) 耳川のダムと発電所

耳川には、わが国最初のアーチ式ダムなど、地形と水量をいかして昭和初期からたくさんのダムが作られています。



耳川の発電所とダム

発電所							ダム						
発電所名	河川名	発電形式	流域面積 km ²	最大出力 kw	最大使用水量 m ³ /s	有効落差 m	ダム名	型式	堤長 m	高さ m	ゲート数 (門)	有効貯水量 m ³	運転開始
上椎葉	耳川	ダム水路式	292.20	90,000	73.00	144.00	上椎葉ダム	コンクリートアーチ式	341.000	110.000	4	76,000,000	S30.5
岩屋戸	耳川	ダム水路式	363.72	50,000	75.00	80.40 80.20	岩屋戸ダム	コンクリート重力式	171.000	57.500	8	6,358,000	S17.1
塚原	耳川	ダム水路式	494.80	62,600	73.80	100.08	塚原ダム	コンクリート重力式	215.000	87.000	8	19,555,000	S13.9
諸塚	耳川	ダム水路式 (混合揚水)	114.70	50,000	27.00	226.40	諸塚ダム	中重力式コンクリート	149.500	59.000	1	1,260,000	S36.2
							宮の元ダム	コンクリートアーチ式	87.436	18.500	1	62,000	
山須原	耳川	ダム水路式	598.58	41,000	120.00	40.79 40.35	山須原ダム	コンクリート重力式	91.140	29.404	8	1,260,572	S7.1
西郷	耳川	ダム水路式	647.79	27,100	120.00	27.27 26.16	西郷ダム	コンクリート重力式	84.540	19.964	8	1,222,450	S4.12
大内原	耳川	ダム式	741.00	16,000	120.00	16.20	大内原ダム	コンクリート重力式	152.620	25.500	6	1,239,000	S31.6

●^{かみしいば}上椎葉発電所:九州電力(株)

上椎葉発電所は耳川水系の最上流部、秘境^{しんげ}椎葉村に建設されました。昭和25年に工事の認可を受け、アメリカの海外技術顧問^{きしやつこもん}団の協力を得て、5年後の昭和30年5月に完成しました。わが国最初のアーチ式ダムで、高さ110メートル、長さ341メートル、有効貯水能力は7,600万立方メートルもあります。この事業は総工費149億円で、当時第一級の大プロジェクトとして全国的にも注目されました。

●^{いわやど}岩屋戸発電所:九州発送電(株)

昭和17年1月に運転を開始しました。その後、上流の上椎葉^{かみしいば}発電所の運転開始に合わせてもっと効果的に使うため増設工事が行われ、昭和35年11月に完成しました。

●^{つかばる}塚原発電所:九州送電(株)

塚原^{つかばる}発電所の工事は昭和10年4月に始まり、昭和13年9月に完成して発電を開始しました。古園^{ふるその}に堰堤を作り、発電を行っています。この古園ダムには、七ツ山^{ゆみき}弓木から水が送られ、弓木のダムはもっと上流の柳原川古原から取水しています。

●^{もろつか}諸塚発電所:九州電力(株)

昭和36年2月に発電を開始しました。七ツ山川と支流^{かわうち}の川内川を柳原川に集め、発電所上方の貯水槽まで6,850メートルの導水路^{どうすいろう}を設けて送水しています。この導水路には他にも柳原川支流の板井川からも取水しています。

●^{やますばる}山須原発電所:九州送電(株)

昭和7年1月に発電を開始しました。その後、ダムの底に土砂が積みもり浅くなり、昭和29年の台風12号、30年の台風22号に水害が起こったため、諸塚^{もろつか}村がダムの撤去を申し入れるという事態になりましたが、損害の補償とダム管理を厳重にすることで解決しました。

昭和53年度には、電源開発基本計画に合わせて県内で最初に増設された山須原^{やますばる}発電所と、引き続き増設された西郷^{さいごう}発電所の完成を待ち、さらに下流の大内原^{おうちばる}発電所を合わせた耳川水系発電所として一緒に使う事ことになりました。

●^{さいごう}西郷発電所:九州電力(株)

耳川を初めてせき止めて建設された発電所で、昭和4年12月に発電を開始しました。

●^{おうちばる}大内原発電所:九州電力(株)

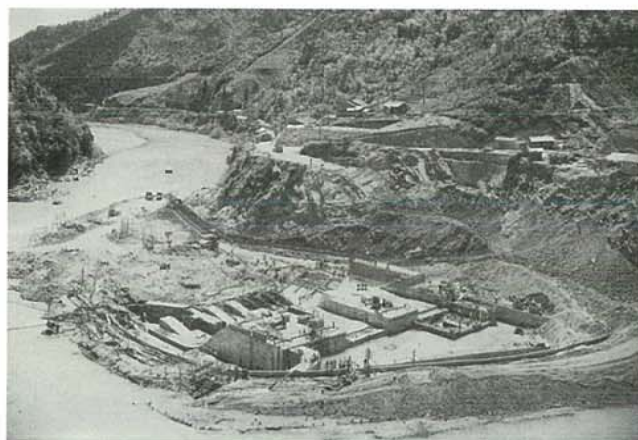
有効落差16.2メートルという九州最初の低落差ダム式発電所で、昭和31年6月発電を開始しました。今日では石峠^{いしとうげ}ダム湖としてレジャーでも利用できるように整備されています。



上椎葉ダムの建設中のようす(昭和25年頃)



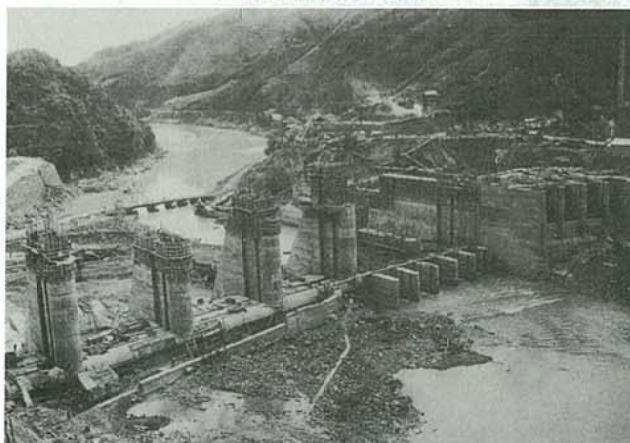
ダムができるようす(大内原ダム、昭和30年頃)



基礎をつくっているところ



「柱」が立ちはじめた



5-2:その他水利利用の歴史

現在、耳川の水は発電用水だけではなく、農業用水や工業用水として利用され、日向市民の飲み水ともなっています。日向市民にとって、まさに命の水とも言える耳川ですが、現在に至るまでには、多くの人々の苦労がありました。

これらの水利利用を目的として、水を流域に引くことを導水^{どうすい}と言いますが、当初、地元と新聞の記事では耳川からの導水を「分水^{ぶんすい}」として扱っていました。

(1) 耳川の導水問題

① 分水反対運動

農業用水を耳川から引くという計画には、反対する者もありました。

[5-2-(1)-①]:財光寺、日知屋、権現町、富高、亀崎^{※1}一带は、天^{てん}水^{すい}による単作^{たんさく}地帯で、しかも水路等の整備が十分でなかったため、不安定な農業地域でした。

したがって、農業の発展のため耳川からの引水が長年望まれてきました。

しかしながら、耳川からの引水は、美々津港への影響が懸念され、美々津町(現日向市)において反対が起こり、計画は実現の運びには至りませんでした。

その後、富高、細島両町の合併機運が急速に高まるなか、耳川からの引水がかんがい用水、その他の産業開発上重要であることが再認識され、昭和14年度に県営富島農業水利事業として着手されました。

※1天水:雨の水

※2単作:米など一種類の作物を作ること

※3かんがい:水路を作って田畑に必要な水を引き、土地をうるおすこと



当時の新聞記事



② 水利事業の経過

昭和14年に着手した水利事業は、途中で戦争などで中断され、昭和23年に完成しました。

【5-2-(1)-②】：県営富島農業水利事業は、昭和14年に工事に着手しましたが、途中、資材不足や戦争による中止期間があって、昭和23年によく完成しました。

しかしながら、地盤が悪くたびたび被災したため、昭和36年から昭和43年にかけて用水路の全面的改修が行われました。

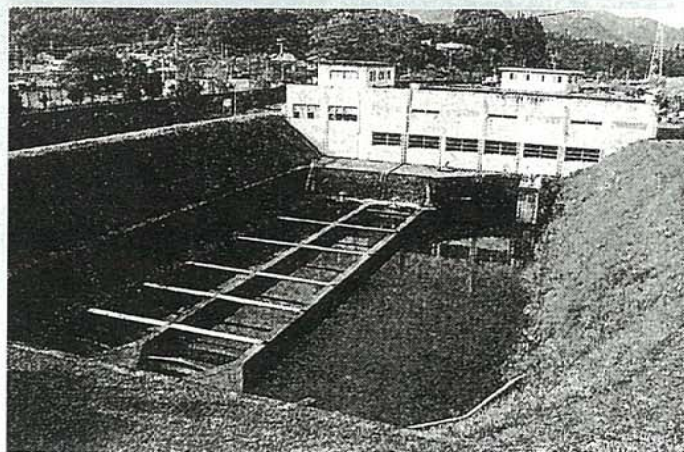
(2) 日向・細島臨海工業地帯の工業用水

日向・細島臨海工業地帯に工業用水を供給するため、耳川から導水することとなりました。

【5-2-(2)】：細島の開発は地元の強い働きかけもあり、県は昭和27年に細島臨海地区の造成工事に着手し、工業用地の造成や港の整備を進め、工業誘致態勢を整えました。

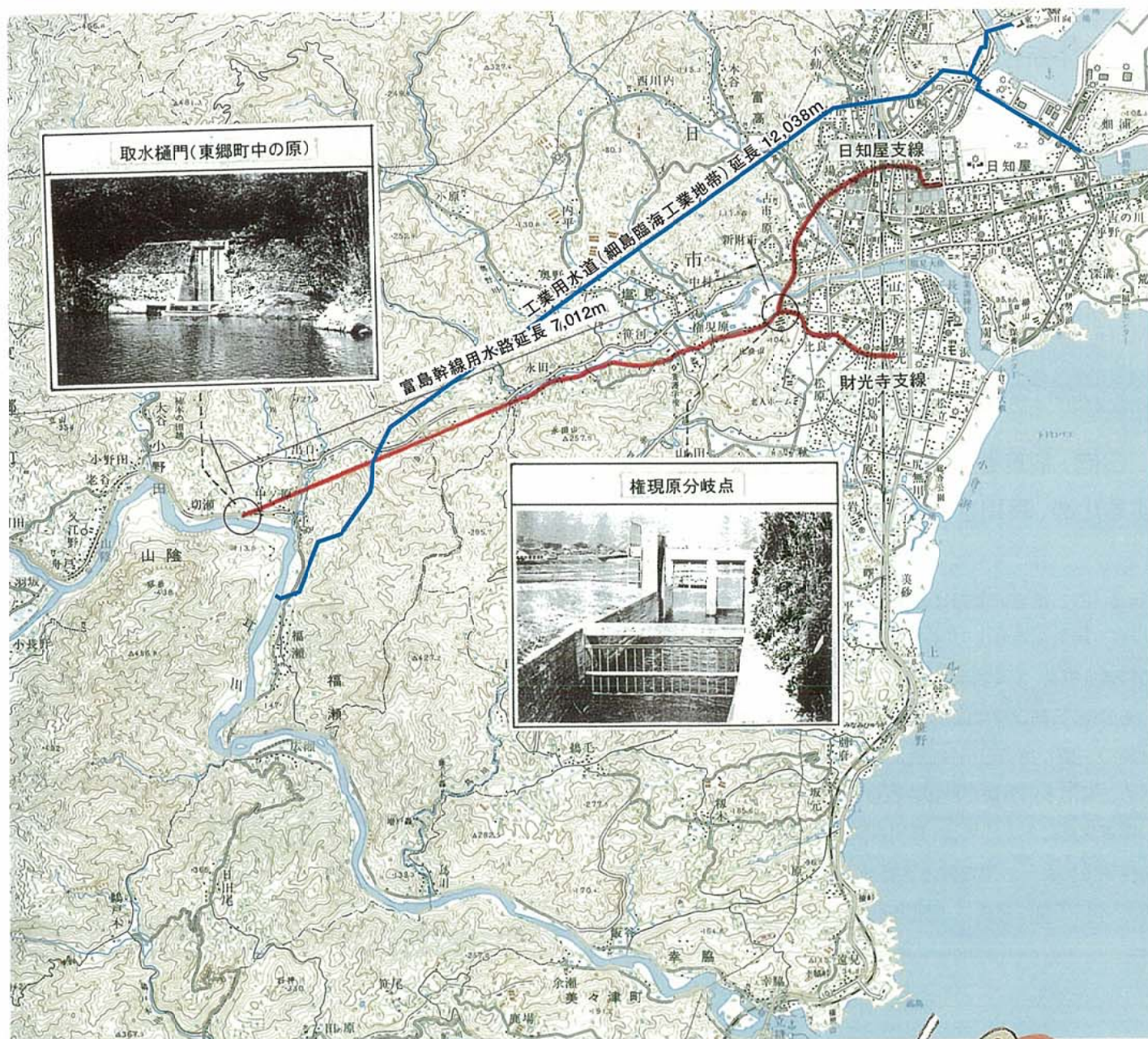
その後、日向延岡地区新産業都市に指定され、新産業都市建設計画の一環である日向・細島工業地帯の工場等に水を供給するため工業用水道事業が計画されました。

事業実施にあたっては、耳川分水対策期成同盟会や用水道布設事業敷地買収対策塩見地区委員会等との補償交渉を進め、昭和37年に工事に着手し、昭和39年に完成しました。

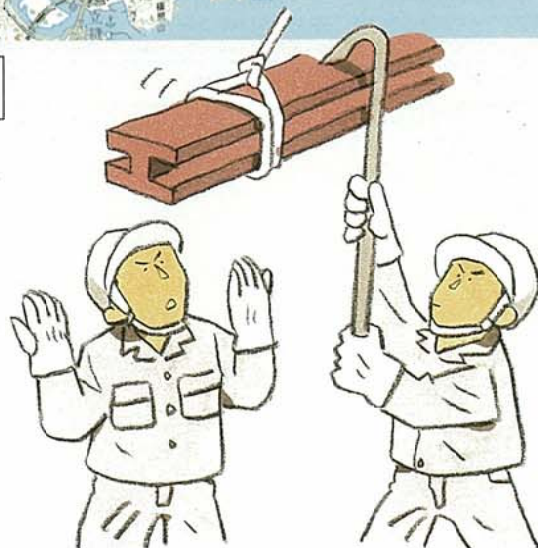


昭和37年完成の県工業用水道管理建設場

みみ かわ どう すい
耳川からの導水ルート



この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。
(承認番号 平12九複、第598号)



6. 自然の恵み

6-1: 生き物

(1) 植物 — (宮崎植物研究会: 河野耕三先生)

① 耳川の流域と河辺にみられる植物

耳川の流域は森林が育つに十分な自然条件を備えており、暖かさの違いから海拔1,000m付近を境にして、植物の分布に特徴があります。また、耳川の下流部には沖積平野が形成されていないため、県内の河川とは異なった河辺植生が見られます。

[6-1-(1)-①]:

(I) 流域の植物・植生

植物が発芽生育し、幾世代も存在し続けられる背景には気候条件や土壌条件などの他、たくさんの要素があります。その中でも流域の植生に対して大きな影響力を持つものは気温と降水量の条件です。その点、耳川流域の年間平均降水量は下流部で約2,400mm、上流部では3,000mmを超えるところもあり、全域で森林が育つに十分な条件を備えています。しかし、気温の方は海岸から海拔1,739mの国見山まであり、上流と下流では相当な温度差があります。

ところで植物の生育に必要な最低温度は5℃だと言われています。この数値を基準に、月平均気温が5℃を超えた数値を1年を通じて合計した温度を暖かさの指数と言います。指数が85～180であれば照葉樹林、45～85であれば夏緑広葉樹林となります。耳川流域では下流で約134、上流部に位置する上椎葉でも約124あります。85以下になるのは耳川上流部でも源流に近い海拔1,000m付近より高い所からです。

耳川流域を温度(暖かさの指数)を参考に、海拔高度の違いによって植物の垂直的な分布を見てみると大きく次のように分けることができます。

【海拔1,000m以上・夏緑広葉樹林帯】

冷涼な気候を好むブナ、イヌブナ、ミズナラ、コハウチワカエデ等が優占する森林が生育しています。山頂部岩場付近にはツクシドウダンツツジ、ツクシシャクナゲ、オオヤマレンゲ、湿性谷

状地にはサワグルミ、シオジ、カツラ、オヒョウなどが見られます。又、キレンゲショウマ、ワタナベソウの他、ミヤマビャクシン、ウスユキソウ、ヤハズハハコ、レイジンソウなど、日本列島の変動や気候の変動をくぐり抜けて生き延びてきた大変稀少な植物も見られます。

【海拔1,000m以下・常緑の広葉樹(照葉樹)林帯】

海拔およそ1,000～750mには常緑針葉樹のモミやツガが優占し、アカガシ、ウラジロガシなどのカシが混生した樹林が見られます。発達した古い森林では着生植物のオサラン、カヤランなどを見ることがあります。海拔およそ750m～450m付近にはウラジロガシ、シラカシ、ツクバネガシ、イスノキなどが優占したカシ林が見られます。又、海の影響が少なくなった福瀬付近から上流の海拔およそ600m付近の谷沿いにはイチイガシ、コジイ、タブノキ、ウラジロガシなどが優占したカシとシイの混生林が見られます。今でこそ絶滅に瀕した植物にリストされていますが、かつてはカシ林には多くのラン科植物、例えばフウラン、ナゴラン、セッコクなどの着生植物をはじめ、エビネ、キエビネ、ガンゼキラン、カンランなどを見ることが出来ました。福瀬神社の境内には宮崎版レッドデータブック準絶滅危惧にランクされ、この種では世界最大級のハナガガシを見ることが出来ます。海岸付近の海拔およそ300m付近にはスダジイ、アラカシ、タブノキ、ヤマモモなどが優占する森林が見られます。耳川河口右岸の権現山にその典型的な姿を見ることが出来ます。

※写真の出典: 宮崎県の保護上重要な野生生物、宮崎県



フウラン

ナゴラン

エビネ

キエビネ

ガンゼキラン

カンラン

ハナガガシ

(II) 河辺域の植物・植生

河川水に強く影響を受ける河辺域の空間だけに限ってみると、同じような気温条件であれば水量と水の流れる速さの違いによって生育する植物の種類や成立する植生は大きく異なってきます。一般に大きな河川は山地峡谷型の上流部、低山地谷型の中流部、低地平野型の下流部に区分されています。こうした河川環境の違いが河川水辺に生育する植物や植物群落に特徴を創り出しています。しかし、耳川では下流部に沖積平野が形成されることなく日向灘に注いでいるため真の意味での下流部は存在しません。したがって、県内の大淀川をはじめとする大きな川の下流部に一般に見られる湿地性のヨシ、セイコノヨシ、マコモ、ヒメガマなどの群落や、アカメヤナギやジャヤナギなどからなる高木性のヤナギ群落などを見ることはほとんどありません。

耳川源流の湧水辺にはウチワダイモンジソウやジンジソウ、ナルコスゲなどが見られます。少し下った溪流辺の湿った岩場にはアワモリショウマ、ヒュウガギボウシ、セキショウなどが、

砂地や礫地にはツルヨシなどの河辺植生が見られるようになります。川幅も広くなる岩屋戸ダムから山須原ダム付近の河辺沿いにはツルヨシをはじめ、ノリウツギやツクシヤブウツギなどの夏緑広葉低木を交えた河辺低木林が見られるようになります。山須原ダムから大内原ダム付近にはツルヨシ、ネコヤナギなどの河辺植生や、トダシバ、ホソバコンギク、ナンテンハギなどからなる河岸岩上植生、南限植物のカワラハンノキを含むハルニレ、メダケなどの河畔林が局所的に見られるようになります。大内原ダムから下流になると水の流れも一段と緩やかになり、ツルヨシ、メダケ、ホテイチク、マダケ、モウソウチクなどの他、エノキ、ムクノキ、タブノキなどの混生した様々な河畔林が所々に見られるようになります。河口付近には大きな礫質の中洲が発達していて、希産種であり絶滅危惧種でもあるオオバネムと、アキグミ、ネムノキ、アカメガシワ、エノキなどが混生する独特の河辺低木林を見ることが出来ます。

自然の恵み—(耳川文化の会:中田 豊さん(東郷町)のお話)

春と言えば草木の新しい芽が出て冬眠から醒めた大自然の息吹が活発となるにつれて鳥や獣や昆虫まで一斉にそろって動きだす姿が見られる。

道端や田圃の溝には土の中で冬を過した蛙が出て来て卵を産み落とし、やがてはオタマジャクシが育つようになる。

裏作の麦など作っていない田圃はれんげが花の絨毯を敷いたように一面がきれいになる。それまでは牛や馬の飼料がなかったため、「草切りに行ってこい」と言われた子供は、そのれんげ草に目をつけて友達を誘って草切りに行き、他人の田圃の一番よく出来たような所のれんげを切っては見つけられてよく叱られたものである。

子供達は草切りは程々にして今度は遊びに興ずる。家から鉈を取出して山から樫の木を切って来て五十センチ位に切って先をとがらし、一人で数本宛持って「ゴイ」の遊びが始まる。「ゴイ」と言うのは田圃の中に相手が立てた木に自分の木を立てながら強く当てて倒れたらその木は自分のものになる遊びである。これが面白いのでつい時の経つのも忘れて帰りが遅くなることもあった。

これは男の子だけの遊びであるが、野原や土堤に芽を出したツバナを取って中身を開くと穂になるばかりの軟い白身がある

のでそれを食べたりしたが、そのツバナを何本も寄せ合せて立て、それを目掛けて一本のツバナを投げ掛けて倒す遊びをした。

今はテレビで時々見るが、竹を切ってきて竹馬を造り、はだしで乗って馴れてくると競争したり、又足場を高くして乗ったりしてよく遊んだ。

養蚕が盛んであったから畑の中だけでなくあちこちの土堤にも桑の木が植えてあり、大分古い木もあったが、桑の花が咲き実がなる頃になるとそんな古木には特に実がたくさんなって、子供達はみんなでその実を食べ唇が紫色になることがあった。

川端に行けば「サドガラ」(いたどりのこと)を取って食べ、山や谷間に行けば自然のイチゴを取って食べ、水鉄砲のような格好に造った「イチゴポッポ」の中に入れて掲ぎあま酢ゆい汁を飲んだり到着で自然の中に食べ物を見つけて食べ自然と共に生きている感じであった。

その頃は農薬の散布がなかったので、トンボや、蝶や虫などたくさん昆虫類が野や山やそして田舎の家の周囲で繁殖し、麦を刈ってホタル篝ができる頃には何処も其処もホタルの群れがいっぱいで子供達は勉強もそこそこにホタル捕りに出掛け、「ホーホ、ホタルコイ、アッチノ水ハ苦イソ、コッチノ水ハ甘イソ」と繰返し大きな声ではやしなながらホタルを捕って遊んだりした。

② 耳川水系の環境変化

戦後間もない昭和25年頃までの植林は、村落に近い地味の良
い里山を中心に限定的に行われてきました。しかし、昭和25年頃
から戦中戦後乱伐された跡地に対する植林活動が開始され、更に
昭和32年からは拡大造林政策が推進される中で植林面積は急速
に拡大していきます。5年間で植林される面積は、それまでの何
百倍のスピードで広がっていきました。また、これまでの交通の
便利な地味の良い場所のもとより、奥地までスギやヒノキ、クヌ
ギなどが植えられていきました。その結果、昭和54年頃までには
森林面積のおよそ60%が人工林になりました。

ところで、人工林が増えたことにより自然環境にも変化が起こ
ってきました。たとえば、植生を中心とした自然景観や野生生物
の減少です。自然景観では耳川河口付近から源流部に至る自然の
緑の装いが、季節毎に大きく変化するものから単調に変化するも
のになってきています。かつては源流部一帯に広がる夏緑広葉樹
林が四季毎に大地を装い、中～下流域に広がるカシ林・シイ林・タ
ブ林等の照葉樹林が初夏に色とりどりの新緑で装うなど、それぞ
れ感動的な自然景観を創り出していました。しかし、自然林が人
工林に置き換えられていく中、自然とともに変化する大地の変化
は薄らいでしまいました。

一方、そうした植生の変化は大きな森の樹と共生してきたナゴ
ランやフウランと言った着生植物、特定の植物に寄生している植
物や動物にも影響を与えてきました。動物ではコノハズクやクマ
タカと言った猛禽類をはじめ、ニホンザルやムササビ、ヤマネな
どの動物が減少してきました。

また、植生の変化は、水資源の涵養機能や山地崩壊防止などの
森林がもつさまざまな「保全能力」に影響を与え、さらには、腐植
層の浸透性やフルボ酸鉄等の形成能力を低下させることにより、
水生植物や魚介類の生息環境などに少なからぬ影響を与えてい
ることが指摘されるようになってきました。



(2) 魚 類 — (宮崎大学農学部附属水産試験場: 神田 猛先生)

耳川上流の水のきれいなところには、ヤマメやタカハヤがすんでいます。中流では、アユ、オイカワ、それにカワムツなどが多くすんでいます。下流から海にかけては、コイ、ギンブナなどのほかに、アカメやカマキリなどのめずらしい魚もすんでいます。また、川と海の間を行き来する多くのハゼの仲間もいてにぎやかです。さらに、美々津の近くの海にすんでいる魚や貝などの生き物たちも、耳川から海へ運びこまれた栄養をもとにして育っています。

[6-1-(2)]: 魚は、それぞれの種にとって適した場所で生活します。生息場所の水温、流れの速さ、流れる水の量、川底の性質、岩に生えている藻類の量、水生昆虫の量、水草があるかないかなどの生活条件が違えば、棲んでいる魚も違ってきます。

耳川で見られる魚を上流域、中流域、下流域、それに感潮域の4つに大きく分け、それぞれの水域に見られる魚を挙げると以下ようになります。

●上流域(岩屋戸ダムより上流部)

ヤマメ、タカハヤ、ウグイ、カワムツ

●中流域(岩屋戸ダム～大内原ダム)

アユ、タカハヤ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ギンブナ、カマツカ、ヨシノボリ類

●下流域(大内原ダム～感潮域の上限)

アユ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ギンブナ、カマツカ、モツゴ、メダカ、ボウズハゼ、スミウキゴリ、ゴクラクハゼ、ヨシノボリ類、チチブ類、カマキリ、ボラ



●感潮域(海水の影響を受ける流域)

アユ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ユゴイ、アカメ、ボウズハゼ、スミウキゴリ、ゴクラクハゼ、ヨシノボリ類、チチブ類、ヒナハゼ、マハゼ、ミミズハゼ、シロウオ、ボラ、ギンガメアジ

上記の魚種のうち、タカハヤ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ギンブナ、カマツカ、モツゴはコイ科と呼ばれるグループに属し、ボウズハゼ、スミウキゴリ、ゴクラクハゼ、ヨシノボリ類、チチブ類、ヒナハゼ、マハゼ、ミミズハゼ、シロウオは、ハゼ科と呼ばれるグループに属します。

カワムツにはA型とB型がそれぞれ別種とされていますが、耳川で見られるのはカワムツB型です。ヨシノボリ類にはシマヨシノボリ、オオヨシノボリ、トウヨシノボリなどが含まれています。チチブ類にはチチブとヌマチチブが含まれていますが、耳川ではヌマチチブの方が多いようです。カマキリは、別名アユカケとも呼ばれるカジカ科の魚です。

なお、普通の観察では見つけにくいので、ここには挙げませんが、ウナギは広い範囲に分布しているものと思われます。人の手で放流されて棲むようになった魚としてニジマスとワカサギがいます。さらに、ブルーギルやブラックバスなどもいるとされています。

「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック(水産庁編)」

によると、先に挙げた魚の内、メダカは絶滅危惧種、アカメ、カマキリは減少種、タカハヤ、シロウオは減少傾向種に挙げられています。これらの魚はもちろんのこと、他の魚に関しても生活環境を保護していく必要があります。また、本来生息していなかったワカサギを放流することにも慎重でなければなりませんが、ブルーギルやブラックバスなどの生態系に与える影響の大きな外来魚の移植は禁止されているので、放流してはいけません。

耳川の魚の分布を考える上で重要なことは、流域にあるダムが存在です。川をせき止めるダムを越えて魚が移動するための魚道がないので、魚は移動をはばまれています。特に、アユやハゼ科魚類等の通し回遊魚に与える影響は大きいと考えられます。実際に、卵からふ化した直後の仔魚期を海で過ごすハゼ科の魚は、大内原ダムより上流部ではごくわずかしかいません。また、上流域で育ったアユが下流域の産卵場に降河できないため、耳川生まれのアユは育っていません。

川は、そこに棲む生物を守り育てているばかりでなく、陸上の栄養分を水に溶かして海へ注ぐことにより、海の生物も育てています。河口の近くには、さまざまな生物が生活する豊かな海が広がっています。美々津周辺の手で見られる魚や貝などの生物は、耳川の恩恵を受けて育っていると考えるのも良いでしょう。

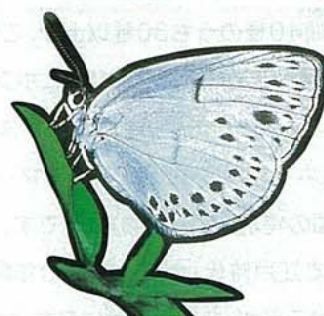
※通し回遊魚:一生のある時期を海で過ごし、別の時期は川で過ごすため、川と海の間を行き来する魚類。

(3) 昆虫類 — (日本野鳥の会評議員:中島義人先生)

耳川の上流は豊かな自然が残っているため、いろんな昆虫がいます。

【6-1-(3)】:耳川流域の上流(塚原ダム～上流)には、オニヤンマ・ミヤマアカネ・ミスジチョウ・オオムラサキ・コベニモンメクラガメ・アカシジミ・ウラゴマダラシジミ・オオウチワグンバイ・ヨツボシメクラガメが見られます。

中流(大内原ダム～塚原ダム)にはハグロトンボ・オオムラサキが見られます。



ウラゴマダラシジミ

(4) 鳥類 — (日本野鳥の会評議員: 中島義人先生)

耳川の流域には、九州に住む野鳥のうち、約半数の種類がいます。

【6-1-(4)】: 耳川の流域には、宮崎の野鳥336種のうち、半数以上が生息しているといわれています。また、ダム湖が五つあることから、オシドリやカモ類などの水鳥も渡来します。流域の地形はかなり険しくV字谷もあることなどから、クマタカなどの猛禽類やカッコウ・ツツドリ・ホトトギス・コノハズク・ブッポウソウ・キビタキ・オオルリ・ゴジュウカラ・ホシガラスなどの低地では生息しない鳥類の生息地になっています。

上流域(塚原ダム～上流): アオサギ・オシドリ・ヤマセミ・カワガラス・ハシボソガラスなど

中流域(大内原ダム～塚原ダム): オシドリ・セグロセキレイ・ハシボソガラスなど。

下流域(河口～大内原ダム): コサギ・アオサギ・マガモ・カルガモ・ヒドリガモ・ヨシガモ・キセキレイ・セグロセキレイ・ヒヨドリなど。



ブッポウソウ



コノハズク



オオルリ



クマタカ



ホシガラス



ヤマドリ

(5) 哺乳類 — (日本野鳥の会評議員: 中島義人先生)

耳川の流域は野生動物も多く、九州にいる40種のうち30種がいます。

【6-1-(5)】: 耳川の流域には、地形的に陰阻地が多く、山地は照葉樹林が繁茂し、野生哺乳類の生息地となっています。九州全体に生息する哺乳類40種のうち30種以上が、この地帯で見られます。その主な種はヒミズ・コウベモグラ・ニホンザル・ノウサギ・ムササビ・ヤマネ(国の天然記念物)・スミスネズミ・カヤネズミ・アカネズミ・キツネ・タヌキ・イタチ・アナグマ・イノシシ・ニホンジカ・カモシカ(国の特別天然記念物)などです。

諸塚村において江戸時代(今から約160年前)に捕獲されたクマの足などの加工品が、諸塚資料館に保存されています。

※陰阻地: けわしいところ。



カモシカ



ムササビ



ニホンザル

スミスネズミ



ヤマネ



6-2: 景観
(1) 溪谷美



かんのんだき うえのぼる
観音滝(西郷村上野原)



だき おぼる
おせり滝(西郷村小原)



おまえけいこく
尾前溪谷
(椎葉村尾前)



(2) 河口の河岸林

耳川の河口に広がる樹木地帯は、豊かな自然に恵まれた、耳川の代表的な風景です。

【6-2-(2)】：耳川の河口部は、流水の力によって掘込まれた形状をしています。また、右岸の急な河岸には、数多くの高木が自生しています。耳川の流れとこれらの樹木群が創り出す、水と緑にあふれた景観は、豊かな自然に恵まれた上流の渓谷群と山岳地帯を連想させ、耳川らしさにあふれた川の玄関口を演出しています。

※右岸：川の下流に向かって右側の岸。

日向市



耳川河口



河口近くの河岸林

※河岸林はクスノキが多く、タブノキやスダジイなどの常緑広葉樹林やハマセンダンなどの落葉高木で構成されています。中には樹齢100年を超え、直径1m以上、高さが20m以上の大木もあります。

(3) 流域を代表する景観



立石地区の桜並木

西郷村

りゅう いき だい ひょう けい かん
流域を代表する景観

椎葉村



尾前溪谷



アケボノツツジ(諸塚山)



諸塚山の冬景色



諸塚村と西郷村の間
を流れる耳川

諸塚村



ブナ林の樹氷(諸塚山)



諸塚山の紅葉

東郷町



楠森塚



冠岳



尾鈴山系



坪谷川

6-3: 耳川の幸

(1) 鮎 漁

アユはむかし、耳川のもっとも有名な産物でしたが、近頃ではたいへん少なくなっています。古い漁法も今ではあまり行われていません。

【6-3-(1)】：耳川は海までの距離が約100キロメートルもあり、このうち約半分が急流と清流に恵まれて「鮎」の棲息に適していました。「日向地誌」によると明治初年、東郷町の鮎の漁獲高は42,000匹で、大正4年の記録によると漁獲高は15,000キログラムをこえ、昭和の初めの頃は日豊本線を利用して遠く阪神方面までも出荷する盛況ぶりでした。



① 鮎で漁

むかし鮎は、網ですくってもとれるほどたくさんいました。

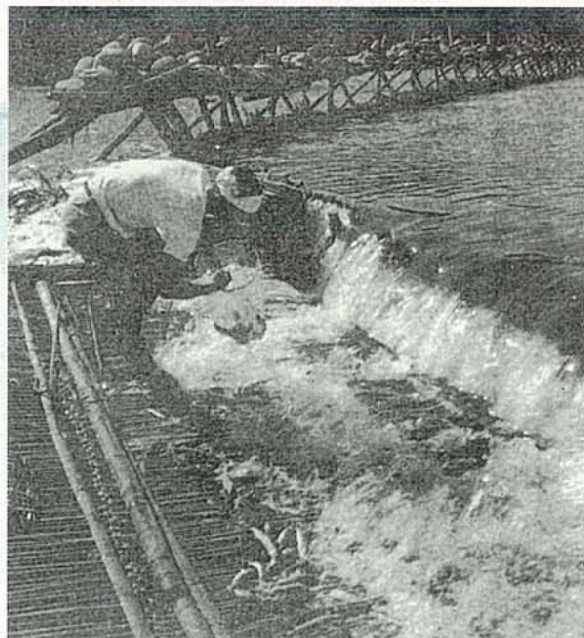
【6-3-(1)-①】：昔は洪水の後で、上流で育った30cmもあるような大鮎がとれました。洪水で流れ落ちた鮎が、川岸を伝って上流へ遡上する時、岩角に立って、長い竿の先についた網ですくうだけで、大鮎が網に入るということもありました。美々津の大鮎は「耳川の鮎のウルカ」と共に全国でも名高い名物でした。

※ウルカ：鮎の内蔵や子を塩漬けにした食品。

② ヤナ堰

木や竹で作ったヤナで川に堰をつくって鮎をとる方法もあります。

【6-3-(1)-②】：耳川には鮎をとる仕掛けの『ヤナ堰』が上流、中流、下流にそれぞれかけられていました。一つのヤナ場には一定の組員がいて、秋風が吹き出す頃になると、木材、竹、縄、カズラの準備をして、川ざらえ、石並べ等の作業を仕上げてヤナ場を作り、それぞれのヤナ場で落ち鮎を待ちました。収穫は組員数で割り、分け合っていました。



③ 鮎^{あゆ}漁^{りょう}の減少^{げんしょう}

ダム^{けんせつ}の建設などで鮎^{あゆ}が減ったために、現在では稚魚^{ちぎょ}を放流^{ほうりゅう}しています。

【6-3-(1)-③】：耳川の鮎漁は、その豊富なことにおいて県下第一とされてきましたが、ダムが鮎の通行を止めたため、量が減少しました。そこで現在ではアユはすべて稚魚^{ちぎょ}の放流^{ほうりゅう}による方法で増やしています。

(2) ふしイダ^{りょう}漁

大きく育ったイダ^{あさ}（ウグイ）が浅瀬^せにいるときは、投網^{とあみ}でとりました。

【6-3-(2)】：三月中下旬になると坪谷川の支流^{つばやがわ}に産卵^{さんらん}のために川^{そじょう}を遡上する、とても大きなイダが浅瀬^せにうごめいているのを見ることができました。このイダを見つけた漁夫^{ぎよふ}たちは、投網^{とあみ}で一網^{いちもう}打^だ尽^{じん}にしていました。中には卵^{たまご}を腹一杯^{はらいっぱい}つめて50cm近くあるイダもいました。

(3) シロウオ^{りょう}漁

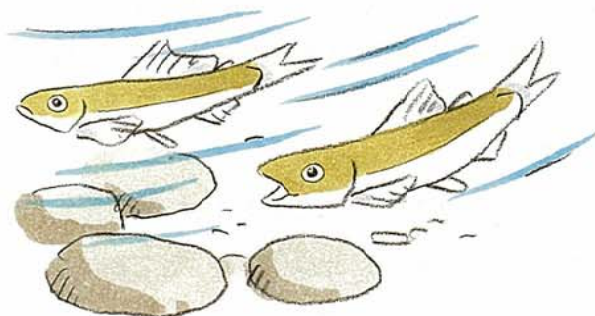
シロウオは網場^{あば}にタモ網^{たもあみ}を沈めておき、引き上げてすくい取ります。

【6-3-(3)】：シロウオは早春^{そうしゅん}に産卵^{さんらん}のために川^{そじょう}を遡上してきます。シロウオ漁は、川岸^{たけし}に竹柴^{たけし}などで網場^{あば}を作り、直径約1mほどのタモ網^{たもあみ}を沈めておき、引き上げてシロウオをすくい取る漁です。

(4) 川ガニ^{りょう}漁

川ガニをつかまえるには、カゴ^{かご}が使われています。

【6-3-(4)】：川ガニは秋風が吹き出すと上流より下流に下がってきます。夕刻^{たけし}、カニ籠^{かご}の中に餌^えを吊し、周囲に重り石をつけて川の中流付近に沈めておきます。翌朝早くに引き上げてみるとカニ^{かご}の中に大小さまざまなカニが入っています。



カニ^{かご}漁の籠



さまざまな川の幸

ほかにも、魚の種類のあわせていろんな仕掛けや取り方がありました。

鮎梁

産卵で河口に鮎が下る9月下旬以降に川に堰をつくり、梁をつくって一定の場所に鮎の落ちる棚を設けて取る。

チョン掛け

竹竿の先にテグスをくくって針をつけ、川に入って箱眼鏡で鮎を見て引っ掛ける。水中眼鏡をかけて川にもぐって泳ぎながら掛ける方法もある。

投網漁

下り鮎の頃、竹柴を川に横に並べて立て鮎が集ったところをねらって網を打つ。(柴堰)

サビキ

川が薄濁りになったとき、鮎が瀬についた頃、1本のテグスに14~5本の針をつないで川の中を無雑作に引き廻してとる。

濁りすくい

台風や大雨のとき、川が濁るので、河川が氾濫した機を見て川岸から大網で鮎などをすくいとる。

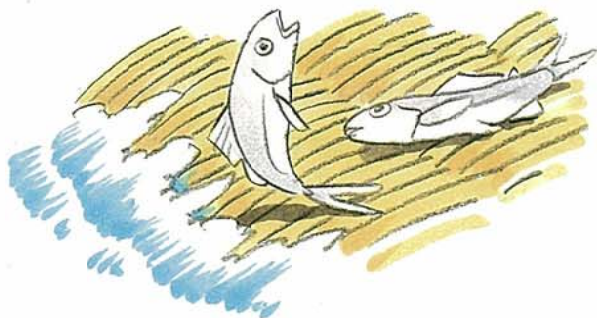
罎掛け(友釣り)

鮎の縄張りの習性を利用して、長さ6~7mの竹竿の先からテグスを延ばし、鼻環を通した鮎をつけ、別に尻部に3本の針をつけ、川底の石の多い瀬に放ち攻撃してくる鮎を掛ける。

鰻ポッポ

直径10cmほどの円形で約60cmの長さの籠の中にミズや生えび、鮎などの餌を入れて川底につけて、翌朝上げて中に入っている鰻をとる。

あゆやな
鮎梁



チョン掛け



チョン掛け用の
「スイガン」



(宮崎県総合博物館展示)

とあみりょう
投網漁



うなぎ
鰻ポッポ



うなぎつ 鰻釣り

70cmぐらい細い竹竿の先に、紐で結んだ針をひっかけて水中の穴の中に差し込んで釣る。

イダ(ウグイ)

籠の中にさなぎ粉、油粕、赤土などを練り合わせたものを餌にして入れ、やや深いところにつけて翌朝引き上げてとる。

こいつ 鯉釣り

鯉は川の淵の深いところにいるので、ふかした芋などを餌にして4月から12月頃までかけて気長に釣る。

かに 蟹

蟹は籠に餌を入れて夕方に川につけ込み、翌朝引き上げてとる。

うけ 笊

小川の適当な所に竹柴や石を並べたりして流出口を狭くして、そこに竹製の尻つぼみの笊をつけて流れ込んだ雑魚をとる。

かんめ 石

川の浅瀬には大きい石が水面すれすれに頭を出しているところがある。こんな所には小魚を無数にいたので、その石の上にやっと持ち上がるような石を頭上から落しかける。その下にもぐっている小魚は衝撃のためふらふらと出て来るのでそれを捕らえる。

ほか その他

金つき、えびすくい、夜間に火を点して釣る夜釣りなどがあつた。

鰻釣りの道具



7. 川遊び

7-1: 魚とりの方法

むかしの子どもは、よく川で魚をつかまえて遊んでいました。つかまえる魚に合わせていろいろな仕掛けも自分たちで作っていました。

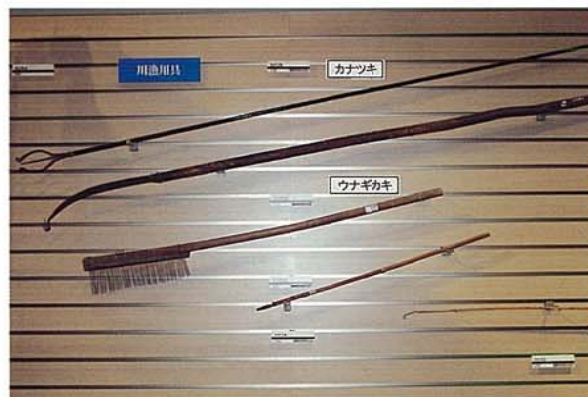
【7-1】: 古い魚とりの方法としては、エビオケつけ、かごつけ、はえなわ、エビとりなどがありました。

かごつけは、ウナギをとるために餌を入れた直径5センチメートル、長さ50センチメートル位の竹かごを水中に仕掛けるのですが、美々津ほどの下流になると、水が深いので干潮で浅い時にもぐって仕掛けていました。

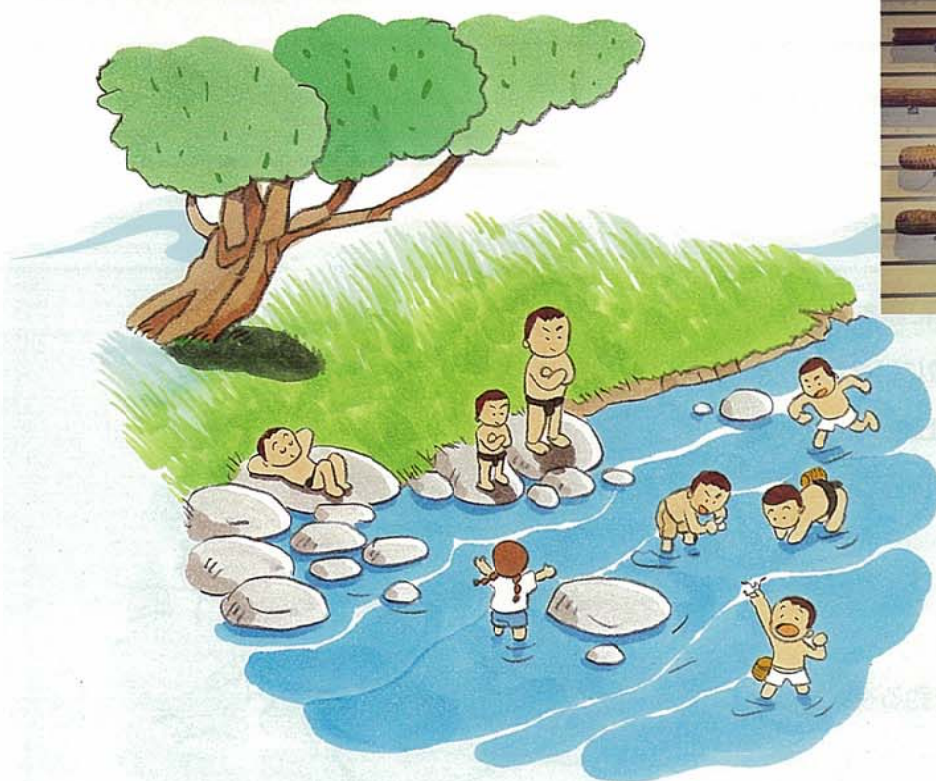
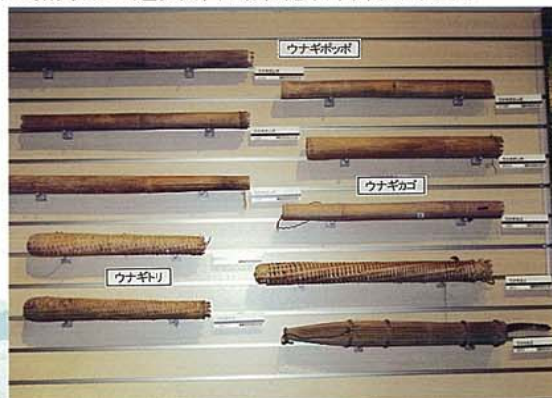
エビとりの時は、カナツキやエビ取りの用の小さなステを手にした子どもたちで、耳川は一杯になりました。

干潮時になると、箱めがねなどを使って川底をあさったり、素手で石の下にひそんでいる川エビをつかまえ、腰にかけた竹カゴをエビ入れに使っていました。

また、米ぬかを水中にまいてエビをおびきよせてつかまえることもありました。たまに、オスのダクマ(ラクマという地域もある)の長いツメにはさまれることもありましたが、きそってつかまえる楽しさや、砂糖としょう油で煮詰つめた川エビの味を満喫することができました。



昔の魚取りの道具(宮崎県総合博物館展示)



7-2: 昔の川遊び

川は生活に欠かせない通路であると同時に子どもたちの遊び場でした。むかしは自然の中での遊びが多くありました。

(1) 材木遊び

【7-2-(1)】: 昔、耳川の流域に住む子供たちの遊び場は耳川でした。川上から木材がたくさん流れて来て、止まっているその材木の上をバランスをとって歩く、ちょっと危ない遊びも流行っていました。



(2) アユの瀬のぼり

【7-2-(2)】: 子供たちが真夏の泳ぎの時にやった『アユの瀬のぼり』というグループ遊びがありました。これは数人の子供達が、胸ぐらの水位のところで、向かい合って並んで両手をつなぎ、人間のレールをつくります。そして、1人がアユになって、そのレールの上を早く泳ぐようにのぼりきらなければならないのですが、レールを作った子供達は前へ進ませないように高くはねあげたりして妨害して遊びました。



十根川で魚取りをする子どもたち

参 考 資 料

- 天領と日向市……(甲斐勝, ぎょうせい)
写真集 宮崎100年……(宮崎日日新聞社)
写真集 日向……(石川恒太郎編, 図書刊行会)
石が語るふるさと……(宮崎県教育委員会)
日向ものしり帳……(石川恒太郎, 解説 甲斐亮典, 鉾脈社)
日向の風土と観光……(総合文化協会, 鉾脈社)
よみがえる山と村……(黒木勝利, 清文社)
日向地誌【復刻版】……(平部嶠南, 青潮社)
日向の自然遺産・文化遺産に学び未来に生かす……(日向市教育委員会)
山陰風土記……(都甲鶴男)
美々津郷土誌……(黒木晩石, 講談社)
宮崎県風土記……(旺文社)
村の風土記……(黒木重太郎, 第一法規)
美々津のあゆみ……(美々津の歴史的町並みを守る会)
みやざき車窓風土記……(鉾脈社)
川の流れと共に……(小林蜂声)
あこのころの村……(中田豊, 舵社)
宮崎県政八十年史(上巻・下巻)……(宮崎県)
宮崎県土地改良史……(宮崎県)
宮崎県企業局五十年史……(宮崎県)
日本の地理②九州地方……(旺文社)
日本地誌ゼミナールVIII九州地方……(大明堂)
街並み保存のネットワーク……(第一法規)
宮崎県林業史……(宮崎県)
宮崎県地学のガイド, 宮崎県の地質とおいたち……(宮崎県高等学校教育研究会 理科・地学部会編)
宮崎県地質図説明書【宮崎県の地質と資源】……(宮崎県)
日本の自然地域編 7九州……(岩波書店)
みやざきの文学碑……(宮崎県芸術文化団体連合会)
若き牧水 愛と故郷の歌……(伊藤一彦, 鉾脈社)
川の本……((財)河川環境管理財団, 山海堂)
耳川……(都甲鶴男, 耳川文化の会)
宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物……(宮崎県)
日向市の歴史……(日向市)
東郷町史……(東郷町)
西郷村史……(西郷村)
諸塚村史……(諸塚村)
椎葉村史……(椎葉村)

耳川百科

「耳川百科」の編纂では、「耳川の歴史と文化を語る会」の委員やアドバイザーの方々をはじめ、多くの方々から御指導、御協力をいただきました。

●耳川の歴史と文化を語る会

尾形 森衛氏（耳川文化の会、諸塚村）
中田 豊氏（耳川文化の会、東郷町）
黒木 和政氏（耳川文化の会、日向市）
佐竹 明氏（耳川文化の会、日向市）
椎葉 浄信氏（耳川文化の会、椎葉村）
石井 啓夫氏（耳川文化の会、西郷村）
野別 知秀氏（日向市ふるさとの自然を守る会、日向市）
小倉 久信氏（日向市ふるさとの自然を守る会、日向市）
大野 裕氏（日向市ふるさとの自然を守る会、日向市）
甲斐 誠二氏（日向市ふるさとの自然を守る会、日向市）
奥 武之氏（九州電力株式会社）

●アドバイザー

杉尾 哲氏（宮崎大学工学部）
神田 猛氏（宮崎大学農学部）
伊藤 一彦氏（宮崎県教育委員会）
河野 耕三氏（宮崎県立宮崎農業高等学校）
中島 義人氏（日本野鳥の会）

●写真提供

第二安田写真館・黒木 和政氏・寺原 忠男氏・宮崎日日新聞社・
九州電力株式会社・日向市・東郷町・西郷村・諸塚村・椎葉村

宮崎県土木部河川課河川係

〒880-8501 宮崎市橘通東2丁目10番1号 TEL 0985-26-7185

宮崎県日向土木事務所河川係

〒883-0046 日向市中町2-14 TEL 0982-52-4171